女王様は王子様！？

鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女王様は王子様！？

【Ｎコード】
Ｎ３３３６Ｌ

【作者名】
鈴

【あらすじ】
転校生して２日目、学校で一番可愛いと評判の子に、告白された！？　だけどその子は……その子は！　草食系の可愛い男の子に襲いかかる、羨ましくて、時には悲しい青春ラブコメだ！　「知ってたかしら？　愛に、性別は関係ないのよ」

序章

綺麗な夕日が眩しい夕方。

「私、アンタのことが…好きなの」

高校二年生の春。
ボクは、夕日の見える教室で告白されました。

しかも、その相手は学校で一番可愛いと評判の、“春木（はるき）　美魅（みみ）”さんにです…。

綺麗で長い水色の髪。
小顔で童顔。
パッチリした目。
たしかに…可愛いです。

そんな子にボクは、告白されました。

この告白がきっかけで、ボクはとてつもない渦に巻き込まれていくなんて…。

思ってもみませんでした。

1、転校生

６月の朝、高校の廊下

カッターシャツの上に、黒の長袖のカーディガンを着て、紺色のズボンを履いた男子生徒と。
メガネをかけた、赤いジャージ姿の女教師が歩いていた。

“雨宮君(あまみや)”緊張してるの？」

「は、はい…。」

雨宮と呼ばれた男子生徒
フルネームは“雨宮(あまみや)　夏希(なつき)”

綺麗な、長い黒い髪。
可愛い声。
背は低く、ギリギリ１６０ｃｍあるくらいだ。
男の子ではなく、女の子にしか見えない容姿。

今の姿はまるで、男子の制服を着ている女子にしか見えない。

夏希の隣の教師、綺麗で３０歳くらいの高校の教師だ。

緊張している夏希を見て、クスクスと笑っている。

夏希は今日、転校してきた。

転校して来た高校の名は

――“水の都高校”

男女共学の高校で、綺麗な名前に負けないくらいの高校だ。

玄関に大きな噴水があったり、中庭が綺麗な芝生だったり。

夏希には信じられない学校だった。

「はい、クラスに着いたわよ。アナタのクラスは、3組ね。」

夏希は今日から、水の都高校2年3組だ。

教室の中からは、騒がしい声が聞こえている。

もしかすると、転校生が来るという情報が、とっくに流れていたのかもしれない。

「う…うう。」

バクバクと心臓が鳴る。

夏希は重度のあがり症で、大勢の人前で喋るのが苦手なのだ。

ましてや、転校してきて顔も名前も知らないクラスメイトに、自分だけ自己紹介をするなんて…。

夏希は、嫌だった。

だが、拒否権は夏希には存在しなかった。

予告も無しに、先生が教室のドアを開けたのだ。

「ちょっ……――」

「は～い、静かに！！朝のホームルーム始めるわよ！！席に座りなさい。」

先生は教室に入っていった。

ドアは開きっぱなし、先生は夏希が後ろから着いてくるだろうと思っていたようだ。

だが、夏希は廊下に立ち尽くしたままだ。

何故なら、緊張で足が動かないから。

「あら？どうしたの？早く入ってきなさい。」

「は…はぃ…！！」

声が裏返り、変な声がでる。

カチカチに緊張している夏希は、まるでロボットのようなカクカクした動きで教室に入った。

教室にいる生徒達の目線が、夏希に集中する。

ヒソヒソと小声で話していたり、笑っていたりする声が聞こえる。

そして夏希は、教室のドアを閉めるのを忘れた。

「はい、もう知っている人は知っているかもしれませんが。このクラスに、新しいお友達が増えます。」

先生は黒板に夏希の名前を書きながら、まるで小学校のような紹介をした。

「じゃあ、自己紹介お願いね」

先生は、下を向いている夏希にバトンタッチした。

「は…はひぃ…！！」

また、声が裏返った。

そして、クスクスと笑う声が増えた。

夏希は頭を下げながら――

「ボ、ボクの名前は…あ、雨宮…な、夏希…ですっ…！！ぃ…家の…じ…事情で、転校しました…！！な…仲良く…してくだしゃい…！！」

“してくだしゃい”
声が裏返ったままで、しかも噛んだ。
「キャハハハ！！」
教室が笑いに包まれた。
「…ぇ？」
夏希は顔を上げる。

「キャー！！可愛い！！」
「えっ！？本当に男か！？」
「女の子にしか見えなぁい！！」

クラスのほとんどが、夏希に軽く見惚れていた。

「は～い、静かに！！」
先生は手を叩く。
「じゃあ、雨宮君に質問がある人はいない？」
先生がそう言った瞬間、３０人いるであろう生徒の半分が手を挙げた。
「はぁ…授業でもこれくらい手を挙げてほしいわね…」
先生は苦笑いしながら、前に座っていた男子を指名した。

「俺、男に興味無いが…お前には興味があr――」

男子生徒は最後まで言えずに、教室の床に沈んだ。
沈んだ理由は、男子生徒の隣に座っていた女の子にアゴを一発殴られたのだ。

女の子は、今どきのギャルと呼ばれる女子高生の格好をしていた。

「バカ言ってんじゃないわよ変態！！ねぇねぇ～！！彼女とかいるのぉ？」

女の子はどさくさに紛れて、質問した。

「え…あ…」

夏希は困っている。

「あ、いないんだ～！！」

図星だった。
今の…と言うか、夏希は生まれてこれまで、女性と付き合ったことがないのだ。
無論、男とも付き合ったことがない。

「じゃあ、私狙っちゃうかもねぇ～」

「う…うう」

夏希は思わず顔を真っ赤にした。

それだけで、何人かの生徒がザワザワと騒ぎ始めた。

「ほ～ら！！静かに！！
他に質問は無いの？
これで最後の質問にするわよ！！」

そして先生は、とある生徒を指名した。

「じゃあ、“春木(はるき)さん”。」

一番後ろの、窓際に座っている生徒。

“春木　美魅(みみ)”。

綺麗な水色の長い髪。
綺麗で可愛い顔立ち。
セーラー服がよく似合う子。

その子は言った。

「キモい」

2、パシり！？

「えっ…？」

さっきまで騒がしかった生徒達が、一瞬で黙った。

「聞こえなかったの？
“キモい”って言ったのよ。」

美魅の言葉に、夏希は困る。

「皆もよ…可愛い可愛いって、バカじゃないの？
あんなチンチクリンのどこが可愛いの？」

美魅は立ち上がり、教室にいる生徒達を見渡す。

「ほら、早く言いなさいよ。」

バンバンと机を叩く美魅。その行為は、生徒達を怯えさせているようにも見える。

「ほら見なさい。やっぱり可愛いのは…この“私”ね。」

悪者キャラがよく笑う笑い方で、笑う美魅。本当に悪者キャラに見えてきた。

「もういいわ、邪魔したわね。」

美魅は夏希を睨みながら、笑って席に座る。満足したようだ。

「ぁ…じゃあ雨宮君、後ろの空いてる席に座ってちょうだい…。」

今まで美魅の発言を、止めようとせず、ただポカンと見ていただけの先生は、夏希の席を指した。

そこは、美魅の右隣の席だった。

「っっ！？」

夏希は嫌だと思ったが、弱気な性格の夏希だから、何も言わずに席に向かった。

クラスメイトと目を合わすのが嫌だった夏希は、下を向いたまま席に急いで座った。

「フンッ…。」

左から、美魅の視線を感じる。夏希は怖くて、前で色々話している先生を見ていることしか出来なかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「はい、じゃあ朝のホームルームを終わりますね。」

先生は笑顔で、教室から出ていった。今から１０分休んで、一時間目の授業が始まる。

「はぁ…」

夏希は軽いため息をついた。周りに聞こえないようにしたつもりだったが。

「あら？ため息なんてついちゃって、そんなに私が気に入らないかしら？」

左から、声がした。

「えっ！？」

美魅の言葉は聞こえたが、あまりの内容に聞き直してしまった。

「あら？一回で聞き取れないなんて…そんなに私と会話したくないのかしら」

「そ…そんなこと言ってないですよ！！何言ってるんですか！？」

夏希は慌て言葉を返すが。

「皆から可愛いって言われたからって、調子に乗らないでちょうだい。世界で一番可愛いのは“私”なんだから！！」

「…」

夏希は思った、“とんでもない人に目をつけられた”と。

「分かったの！？分かったら返事しなさいよ！！

それと、自惚れて自分を可愛いと思わないでちょうだい！！」

「は…はい…」

別に自分を可愛いと思っていなくて、世界で一番美魅を可愛いとも思っていない夏希は、呆れたように返事した。

「分かったならいいわ！！」

ご機嫌になった美魅。夏希は、2年3組になって数十分で疲れていた。

「それじゃあ、貴方は今から私の“パシリ”ね。」

「へっ！？」

今、美魅の口からとんでもない言葉が飛び出た。

「ぱ…パシリ！？」

長い髪をサラリとなびかせて、美魅は言う。

「光栄に思いなさい。
貴方ごときが、私のパシリになれるんだから。」

ニヤニヤと笑って、夏希をからかっているのか、それとも本気なのか…。

とりあえず、この会話は一時間目開始のチャイムで強制終了された。

「フンッ、これから楽しみね。」
美魅は夏希に聞こえるように、そう呟いた。
「うう…。」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

おかしい。何かが変だ。
普通、転校して来たら何人かのクラスメイトに声をかけられるのが、王道なのだが…。誰一人として夏希に寄ってこないのだ。
まるで、何かを恐れるかのように…。

「お茶を買ってきなさい。」
「えぇっ！？」
だが、例外が一人。
美魅だけは、夏希に平気で話しかけて、パシり扱いをしている。
「聞こえなかったの？早くお茶を買ってきなさい。まったく、ノロマね。」
今は昼休憩。

皆、お昼ご飯を食べている。無論、夏希も教室で何故か美魅と一緒に食べていた。

というか、美魅が一方的に夏希を誘ったのだ。

「お茶って…。」

「体育館の近くにあるわよ。早く行きなさい！！」

「は…はい…。」

夏希は何故か逆らえずに、渋々買いに行った。

廊下に出て、夏希はいきなり“迷った”。

夏希は、道を覚えるのが苦手で、先生から体育館の場所を聞いたが、忘れた。

「え…えっと…。」

とりあえず夏希は歩き出した。

水の都高校は

一般の教室が集められた“教室棟”。

教師達がいる“職員棟”。

実験や美術室などがある“授業棟”。

体育や部室などがある“体育館”

他にも小さな建物はあるが、代表的な建物はこの４つだ。

夏希達のクラスは、三階建ての、教室棟という建物の三階にある。

夏希はまだ、学校の形がよく分からない。

夏希が適当に歩いていると…。

「飲み物買いに行こうぜぇ」

他の教室から、男子生徒3人が出てきた。

飲み物…つまり、体育館に行く！！

夏希はこっそりと後ろから3人に着いていくことにした。

すると…。

「あーあ…“ムカつく”よなぁ。」

「本当だ。」

何やら、悪口を言い始めたようだ。

「何で独り占めするかなぁ。俺だって仲良くしたいのによぉ。」

「それに、あの“転校生”、女より可愛かった気がする。」

「ハハッ！！そりゃ言えてる。美魅の野郎より可愛いんじゃねぇか？」

「だな。

ったく、美魅の野郎…転校生を独り占めしやがって。」

「仕方ねぇよ、アイツに目をつけられると、“消される”ぞ。」

――“消される”

その言葉を聞いた夏希は、思わず声を出していた。

「あ…あのっ！！

消されるって何ですか！？」

夏希は3人を呼び止める。

「あん？…って！！お前、転校生！？もしかして聞いてたのかよ！？」

男子生徒達は驚いている。

「勝手に聞いてしまってごめんなさい。」

夏希はうつ向いてしまうが、引き下がる様子は無い。

「転校してきたばっかりで、何も知らないのは可哀想だよな…。」

「そうだな、お前…美魅の野郎に言うなよ。」

「は…はい！！言いません！！」

夏希は微笑み、男子生徒達に近寄る。

「消されるってのはな…、その名の通り“消される”んだよ。」

「…えっ！？」

「美魅に逆らったり、機嫌を損ねるようなことをしたら、学校から消されるんだよ…。“家庭の事情のため転校”って事になってな。」

「そんなこと…できるのですか？」

「できるさ。なんせ、美魅を溺愛している“美魅の姉”が、この学校を牛耳ってる奴だからな。
美魅が気に入らない事があったら、姉は必ず動くのさ。」

3人の男子生徒は本当に怖がっていた…。

「そんな…。」

転校初日で、とんでもない人に関わってしまっと思っていた夏希。

まさか、ここまでとは思っていなかった…。

3、放課後

夏希が教室を出てから１０分経ってから、夏希は戻ってきた。

「か…買ってきました。」

夏希の手には、ペットボトル二本。自分のも買ったようだ。

「あら、遅かったわね」

美魅はお弁当を片付けている最中だった。もう食べてしまったようだ。

「ご苦労様。」

美魅はニッコリ笑って、夏希からお茶を一本貰った。

「っ…。」

夏希は一瞬、美魅の笑顔にドキッとしてしまった。

…先ほどの、男子生徒達の話を聞いたのに、ドキッとしてしまった。

――“美魅は、気に入らない生徒を、学校から消す”。

「……。」

その言葉を思い出した夏希。

「はい、お金。」

「えっ！？」

「えっ、じゃないわよ。お茶のお金よ。」

美魅の手には、１３０円握られていた。

この学校の自動販売機は、缶ジュース１００円、ペットボトル１３０円で売っている。

「ぁ…ありがとうございます…。」

「何よその態度。私がお金を払わない人間に見えたかしら？」

少し不機嫌になった美魅。

「そんなこと思ってないです！！」

思わず嘘をついてしまった夏希、実は少し思っていた。

「まったく…。」

夏希は美魅を見ながら、席に座る。その視線に気づいた美魅。

「何よ、まだ文句ある？」

「な、無いです！！」

夏希は、分からなかった。今の美魅を見ていると、本当にそんなことをする人には見えなかった。上から目線で、偉そうな所もあるが、学校から消すなんて、思えない。

「どうしたのよ？早く食べなさいよ。」

「あ、うん！！」

夏希はお弁当の続きを食べて始めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

時間は過ぎ、放課後。

「ねぇ、一緒に帰らないか？」

「え？」

夏希は、オレンジ色の女物のリュックサックに、教科書など入れて、帰る準備をしていた。

そんなとき、夏希は女の子に声をかけられる。夏希のクラスメイトで、学級委員長だ。

短くて、赤い髪。
体は引き締まっていて、スポーツが得意なカッコイイ女の子。
夏希より背が高く。
セーラー服があまり似合ってないように思える。

「えっ…と」

転校初日で、クラス全員の名前と顔を覚えられる訳がない夏希は、
戸惑う。

「あぁ、すまない。
私の名前は“蛍(ほたる)”と言う、“天水(あまみず)蛍”だ。」

夏希に手を差し出し、握手を求めた。

夏希は微笑みながら蛍の手を握る。

「ぁ、ボクは…――」

「雨宮　夏希。
フフッ、あんな可愛い自己紹介をされたら、誰だって覚えてしまうぞ。」

「ぁ、あはは…。」

可愛いと言われて、喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか分からない
夏希は苦笑いをしていた。

「本題に戻るが、夏希君、一緒に帰らないか？」

「え？別にいいですけど…。」

「よかった、じゃあ帰ろう。」

まだ手を繋いだままの２人。蛍は夏希の手を引っ張って、手を繋いだまま教室から出た。

すると…。

「な…ななっ！？何をしているの！？」

教室を出た直後、夏希と蛍は、廊下で美魅と遭遇した。

「あ…あなた達、離れなさい！！何で手を繋いでるのよ！！」

あたふたと、慌てている美魅。まるで、自分の玩具を他の誰かにとられるのを拒むみたいに。

「む、すまない。手を繋いだままだったようだな。」

蛍は優しく、名残惜しそうに夏希の手を放した。

「っ～…夏希！！こっちに来なさい！！」

「えっ！？何で…？」

「いいからこっちに来なさいよ！！」

美魅は夏希の胸ぐらを掴み、自分に引き寄せた。

「委員長、夏希は私のパシりなの。勝手に手を出さないでもらえるかしら？」

「む？“私の”？

夏希は春木さんの“彼氏になったのか？」

「か、かか、彼氏ぃ！？んなわけないでしょ！！何で出逢っていきなり付き合うのよ！！運命の出会い意外ありえないでしょ！！」

「じゃあ、運命の出会いなのだな。」

「じゃあ、って何！？違うから！！運命の出会いじゃないから！！」

必死で否定する美魅。顔が真っ赤になっている。

「もういい！！行くわよ、夏希！！カバンを持ちなさい！！」

美魅は夏希に無理矢理カバンを持たせて、首根っこを掴み引きずる。

「あ、ちょっと！！天水さんと帰る約束が――」

「そんなの知らない！！早く行くわよ！！」

その光景を笑いながら見ていた蛍。

「今日は遠慮するとしよう。また近いうちに、一緒に帰ろう。」

手を優しく振っていた。

「は、はい。」

夏希も手を振り替えした。

「手を振らなくていいの！！ってか、委員長と絶対に一緒に帰っちゃダメ！！」

「えっ！？何でですか…？」

「何でもよ！！
そんなに1人が寂しいって言うなら、特別に私が一緒に帰ってあげるわよ！！光栄に思いなさい！！」

「光栄にって…。」

光栄に思えない夏希。

「何よ、文句ある？」

「ありません…。」

完全に言いなりの夏希。もうパシりでなく、下僕になっている。

そんな2人を見ていた蛍が、ボソッと呟いた。

「…。春木さんって、あんな明るいキャラだったかな？」

4、好きになったきっかけ

「まったくもう！！エロ夏希！！」

校門を出て、ちょっと歩いた所で、美魅は怒った。

「…何で怒ってるんですか？」

「知らない！！」

「はぁ…。」

さっきからこればっかりだった。

すると、怒っていたはずの美魅が…。

「あっ！！そうだ夏希。

今から、駅前のデパートに行きましょ。」

笑顔で夏希に提案した。

「い、今から？」

「そうよ、今からよ。

だってまだ、夕方の４時よ。今から帰っても暇なだけよ。それに、

夏希は転校してきたばかりで、まだこの町を知らないでしょ？」

「う、うん…。」

夏希はこの町に引っ越して、まだ2日しか経っていない。
だから、この町では右も左も分からないのだ。

「ってことで、早く行きましょ！！」

美魅は夏希の手を引っ張って、歩き出した。
遠くから見れば、手を繋いだカップルに見えた。

「そ、そんなに引っ張らないでください。」

「善は急げよ。」

夏希にとっては、全く善と思えなかった。
逆に、疲れたから夏希は早く家に帰りたかったのだ。

そんな夏希の気持ちを知らない美魅。とっても楽しそうだった。

「ね…ねぇ、春木さん。」

「美魅。」

「えっ？」

「私の名前、美魅って呼んでいいわよ。」

美魅は意地悪そうに笑っている。

「じゃ…じゃあ、“美魅ちゃん”？」

「ちゃん付けって…、アンタ小学生？まぁいいけど。で、私に何か言いたいの？」

「あ、うん…。」

夏希は顔を少し紅くしている。

「手、繋いだままじゃ…その、恥ずかしいかな…。」

「つっ！？」

改めて言われると、美魅もだんだんと恥ずかしくなってきた。

「ば、バカ！！」

美魅は振り払うように、夏希の手を放した。

「まったく、アンタってデリカシーの無い男ね！！」

「ゴメン…。」

子犬のように震えて、謝る夏希。それを間近で見た美魅は、キュンとなってしまった。

「ほ…ほら、早く行くわよ！！」

ちょっと照れているのか、あたふたしている美魅。夏希の前を歩く美魅、早足になっている。

「ま、待って美魅ちゃん！！」

「待たない！！」

つかつかと早く歩く美魅。照れているのを夏希に知られたくないあまり、周りの状況を見れていなかった。

だから、前から歩いてきている3人組の男達に気づくのが遅れてしまい、美魅は3人の中の1人にぶつかってしまった。

「いってーな、ねぇちゃん。」

「あ、ごめんなさい。」

美魅は、男達の目を見ずに謝った。

「はあ？お前、ちょっと態度悪くね？」

1人の男が、美魅の肩を掴んだ。

「ちょっ…触らないでよ！！穢らわしい！！」

パシッと、美魅は男の手を振り払った。

「ああ゛！？んだお前！！」

「キャッ！！」

怒った男は、美魅の胸ぐらを掴んだ。

「テメェ、調子乗ってんじゃねぇぞ！！ああ゛ん！？聞いてんのか！？」

美魅を弱いと感じた男達は、怒鳴りちらす。

すると。

「な、何してるんですか！？」

夏希が美魅に追い付いた。

「夏希…。」

美魅は我慢していたが、今にも泣きそうな顔をしていた。

「んだお前。女か？」

「いや違うぜ、男だ。多分コイツの彼氏だな。」

「美少女、美少年のカップルってか！？ガハハッ！！」

男達は美魅を捕らえたまま、笑い出した。

「何してるんですか！？美魅ちゃんを放してください！！」

夏希は男達に駆け寄るが。

「放せぇ？コイツが喧嘩売ってきたんだぜ？俺達は被害者だ。」

1人の男が、夏希の前に立ちはだかった。

「貴方達が被害者…？どう見ても、美魅ちゃんが被害者にしか見えないんですけど。」

怖かった。だけど、夏希は美魅を助けたいという気持ちが、恐怖より勝っていた。

「うるせえ！！」

「っ…がっ…！？」

突然、視界がぐちゃぐちゃになり、右頬に熱くて鈍い痛みが走った。

――殴られた。

コンクリートに倒れた瞬間、夏希は理解した。

「い…痛っ…。」

口の中を切った。血の味が口の中に広がる。

「夏希っ！！」

美魅の声が夏希の耳に響く。

「……。」

痛い。痛くて怖い。

喧嘩なんてしたことがない夏希。痛くて痛くて涙が溢れてくる。

だけど…。

「止めて！！夏希を殴らないで！！私が悪かったから！！
だから、夏希を殴らないで！！」

「やっと謝ったか。それでいいんだよ。糞女。
あー、なんか興奮してきた。コイツ、俺達で回そうぜ。胸が小さくて、無いのは仕方ないか。ギャハハハ！！」

ニヤニヤと、男達は美魅の体を舐めまわすように見ている。

「っ…く…穢らわしい…。」

「強がる女は、俺達の大好物だ。」
汚ならしく笑う男達。
美魅の胸ぐらを掴んだまま、何処かへ連れていこうとした――。

「ま…待っ…て…！！」

「あん…？」

夏希が、立ち上がった。
フラフラで、今にも倒れそうな体で立ち上がった。

「んだよ、まだ死んでなかったのかよ。」

夏希を殴った男が、再び夏希の前に立った。

「いい加減、死ねよ。」

再び、夏希の右頬をぶん殴った。――が、まだだった。

「っ…ぐっ…放してください…。」

「なっ！？」

倒れなかった。

口から血を流している。足はフラフラ。視界はぐちゃぐちゃ。

だけど、倒れなかった。

「美魅ちゃんを…放してください！！」

夏希は、殴った男に飛びかかった。

「っ…うあぁ！？」

いきなり飛びかかられ、バランスを崩した男は、後ろにおもいっきり倒れる。

そして、不幸にも…。

男はコンクリートに頭を激しく叩きつけた。

「っ…か…。」

あっけなく気絶した。

「はぁ…はぁ…。美魅ちゃんを…放して…ください。」

残り2人を睨み付ける夏希。

「て、テメェよくもやりやがったなぁ！！」

その残りの2人が、夏希に襲いかかろうとしていた――。

「こらぁ！！貴様ら何をしている！！」

男の怒号が、道に響いた。

「へっ…？」

夏希の後ろから、2人の体格のいい警察官が、走ってきていた。

「貴様らぁ！！」

「うわぁぁ！！」

2人の男は警察官から走って逃げた。

「君たち、大丈夫かい！？」

1人の警察官は男達を追いかけ、もう1人は夏希と美魅を保護しに残った。

「は…い…。」

夏希はフラフラと、崩れるようにコンクリートに倒れた。

「夏希っ！？」

泣いていた美魅は、夏希に駆け寄った。

「夏希！！しっかりして！！死んじゃやだ！！」

夏希を抱きしめて、美魅は更に泣いた。

「大丈夫。気絶しているだけだ。でも、早く病院に連れていかないと。」

すると、若い警察官の男性は、無線で何かを話していた。

「夏希…。夏希ぃ…。」

夏希の耳元で、美魅はずっと夏希を呼んでいた――。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

“夏希…。”

闇の中で、美魅ちゃんの声が聞こえる。

何だか、出逢ってまだ1日も経ってないのに。

ずっと前から一緒にいるみたい。

――“気に入らない生徒がいたら、学校から消すんだぜ。”

…そんなことはない。
まだ美魅ちゃんの事、よく分からないけど、美魅ちゃんはそんなことは絶対にしない。
美魅ちゃんは、優しい子です。ちょっと偉そうだけど…。

例えるなら…。
“仔猫”かな？
いつも一匹でいて。
誰かが近づいてきたら警戒して。でも、自分から近づいて甘えてくる。
そんな感じがします。

皆怖がってるけど。

本当は美魅ちゃん、優しい子なんだよ…。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

翌日、放課後。
誰もいなくなり、夕日が照らす教室。

「…美魅ちゃん？」

右頬にガーゼを貼っている夏希。あまりケガは無く、心配するほどではなかった。

だが、皆からは心配されて、夏希は困っていた。

そんな1日が終わり、夏希は帰ろうと思ったが、美魅に呼び出された。

“皆が帰った後、教室に来なさい！！”と、言っていた。

約束通り、夏希は誰もいなくなった教室に来た。

「美魅ちゃん？」

「遅い。」

美魅は、自分の席の椅子ではなく、机に座っていた。

「ゴメン…。」

苦笑いして、美魅に近寄る。

「……。」

美魅の顔が、紅くなっているのが分かった。

何か様子がおかしい。

まだ出逢って2日で、いつものと言えばおかしいが、いつもの偉そうな態度ではない。

ちなみに、朝からそうだった。
朝、教室で夏希は美魅に、おはようと挨拶した。
すると、美魅は“ぉ…おはよう…。”と、小さな声で返事をするだけ。しかも、顔を紅くして、口をモゴモゴしていたのだ。

「美魅ち――」

もう一回名前を呼ぼうとした夏希。だが、美魅の声で止められた。

「夏希っ！！」

「は、はい！？」

美魅は突然、夏希の名前を呼び、深呼吸をした。

「い、いい？
一度しか言わないわよ…。」
「うん？」

スッと息を吸って、美魅は言った。

「私、アンタのことが…好きなの。」

「えっ…。」

一瞬、ほんの一瞬。
2人の時が止まった。

5、熱くて堅くて大きくて

「えっ…えぇぇ！？」

教室に、夏希の声が響く。

「何よ…。」

「だ…だって。まだ出逢って2日だし…。」

「愛に時間なんて、関係ないのよ。」

自信満々に言う美魅。

言いたい事を言えたようだ。さっきよりは、落ち着きを取り戻している。

だんだん、いつもの美魅に戻りつつある。

「ってか、そんなことはどうでもいいわよ！！早く返事をしなさいよ！！」

だんだん苛々してきた美魅。

「え…えっと…。」

夏希もいきなりの出来事で照れているのか困っているのか。モジモジしていた。

「あの、急に言われても…困ります。」

「困ってるなんて、知らないわよ。私は、返事を欲しいの！！」

グイッと美魅は夏希に近寄った。

「…あの時の夏希、とってもカッコよかった。」

「えっ？」

「あの穢らわしい男達に、勇敢に立ち向かっていった夏希…。あの姿に私は、夏希を好きになったの。」

「そ…そんな。」

夏希の胸が、ドキドキして暴れている。

「早く…。そんなに私を待たせないで。」

美魅は、夏希に優しく抱きついた。

「っ…。」

今まで、告白されたことは何度かあった。だけど、夏希にはあまり、いい思い出ではない。

だけど、今回は違う気がした。こんなに可愛い子が、真面目に告白をしてきたのだ。

だけど…――。

「ご、ごめんなさい…。」

「……。」

美魅がピクッと動いたのが分かった。

「美魅ちゃんは、可愛いです。」

「…当たり前よ。」

「う…。で、でもね、まだ出逢って2日だし、そんなに美魅ちゃんの事を知らないの。だから、もっと美魅ちゃんを知ってからじゃ、ダメですか？」

美魅の、夏希を抱き締める手が震えていた。

「私のこと…知りたいの？」

「あ、はい。そう言うことになりますね。」

夏希は笑って、思わず美魅の頭を撫でた。

「じゃあ、教えてあげる…。」

突然、夏希はガクンと、バランスを崩した。

「へっ…。」

美魅に、優しく教室の床に押し倒されたのが分かった。

「み…美魅ちゃん！？」

美魅は倒れている夏希の上に覆い被さるように、乗っかった。

「私のこと知りたって言ったじゃん。」

紅い顔の美魅が、すぐそこにある。甘い吐息が、夏希の鼻をくすぐる。

「で、でも…。まだボク達高校生…。」

「クスッ…何を妄想しているのよ、エロ夏希。」

意地悪く笑っている美魅。

「っっ…！？」

「でも…いいよ、夏希。私は、夏希に触って欲しいな…。」

美魅は夏希の右手を掴んで、自分の胸に押し当てた。

「み、美魅ちゃん！？」

「ゴメンね。私、胸無いの。やっぱり男の子って、胸は大きいのが好きだよね…。」

「そ、そんなことないよ！！ボクは、胸が大きいとか関係なくて、優しい人が好きなの。」

「クスッ…。ありがとう。」

美魅は優しく微笑むと、胸に押し当てていた夏希の手を、足元に移動させた。

「美魅ちゃん？」

「もう我慢できない…。“こっち”も、触って…夏希。」

美魅は夏希の手を、スカートの中に突っ込んだ。

「ちょっと！！それ以上は――。」

「いいから、ちゃんと触って…。」

美魅の強い言葉に夏希は抵抗できず、されるがままになっていた。

夏希の手はスカートの中へと、どんどん入っていく。そして、とうとう美魅の一番感じる場所へと到達した。

「んっ…。」

手が触れた瞬間、美魅がピクッと体を振るわせる。

「っっ…。」

美魅のあそこは…。

“熱くて”

“堅くて”

“大きかった”

「――へっ？」

“堅くて、大きい？”

夏希の手は、何かが“握られていた”。

“熱くて、堅くて、大きい”何かが…。

「んんっ…。そんなに…握っちゃ、ヤだぁ…。

私の“おち○○○”壊れちゃう…。」

夏希の頭の中が、ぐちゃぐちゃにかき回される。

「美魅ちゃんに…ゾウさん…大きな…ゾウさん？」

午後１６時５８分。

水の都高校、２年３組の教室で、この世のモノとは思えない叫び声が響いた。

6、姉

「何よ、そんなに驚かなくてもいいじゃない。」

美魅は頬を膨らまし、教室の隅へと逃げた夏希を睨む。

「美魅ちゃんって…お…男の子…だったの！？」

「そうよ。」

さらりと言う美魅。

「私、自分が女だって一度も言ってないけど？」

「で、でも…。セーラー服だし。」

「いいじゃない。セーラー服も、制服でしょ？だって男の制服って可愛くないもん。」

「うぅ…。」

美魅が、男の子。

信じられない事実だった。

でも、確かに“アレ”があった。触った。男の子にしかない、“アレ”が。

「ねえ、もう触ってくれないの？」

美魅は頬を赤らめ、意地悪そうに笑った。

「さ、触りません！！
男同士は、そんなことしちゃいけないんですよ！？」
「そんなの知らないもん。」
美魅は教室の隅に逃げた夏希に近づく。
「ねぇ、私のこと知れたでしょ。」
「えっ？」
「次は、私が夏希のこと知りたいな。」
美魅は再び、夏希に抱きついた。
「教えて。」
美魅は、自分の唇を夏希唇に近づける。
「夏希って、ファーストキスまだだよね？私が、初めてになってあげる。」
美魅はじっと夏希の目を見つめて、だんだんと近づいてくる――。
「…っ、止めて！！」
夏希は大きな声を出して、震えていた。
「っ、夏希…？」

「ご…ごめんなさい。やっぱり、こんなことしちゃダメです…。」
夏希は美魅から視線を反らす。
「…男だから。」
「えっ？」
「男だから、拒否したの？
私が女の子だったら、キスしてくれたの…？」
美魅は夏希の胸に顔を押し付けていて、表情が分からない。だが、寂しそうな顔をしているのは分かった。
「ち…違っ…――」
「嘘つき。男だから嫌だったんでしょ。男同士がキスをするなんて、気持ち悪いんでしょ。私のアソコを触って、汚いって思ってるんでしょ。」
「美魅ちゃん…。」
「だけど、これだけは言わせて。私、産まれて初めて男の子を好きになったのは、夏希だけ。」
美魅は顔を上げた。涙ぐんだ顔をしていた…。
「“あの日”から、私は人を好きになれなかった…。だけど今、夏

希を好きになれた。絶対、諦めないんだから。たとえ、同性愛でも…。」

美魅はそう言うと、走って教室から出ていった。

「…美魅ちゃん。」

教室には、複雑な気持ちの夏希が残された。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

美魅の家。美魅の家は、よくある普通の一戸建て。

美魅は、自分の部屋のベッドで大きなパンダのぬいぐるみを抱き締めながら、横になっていた。

「夏希…。」

さっきから、夏希の事ばかり想っていた。

自分が男だということを打ち明けるのに、とても勇気が必要だった。

だけど、夏希の優しい笑顔を思い出すだけで、勇気が湧いてくる。

だから、言えた。

どんな展開になろうとも、言えた。

「夏希…。」

ギュッと、ぬいぐるみを抱き締めた。ぬいぐるみを、夏希だと思って…。

「美魅、帰ってたの？」

突然、部屋にノックの音が響いた。

「っっ！？」

美魅は突然のノックに驚き、ベッドから跳ね起きた。

「入るわね。」

ガチャッと扉が開き、女性が入ってきた。

女性は
真っ黒の長い髪。
身長は高く。
スタイルはとっても良い。
綺麗な顔立ちをしていて。どこかのモデルみたいだった。

女性は黒いスーツを着ていて、大人の女性だった。

「ミサト…お姉ちゃん。」

「ただいま、美魅。」

美魅の姉、ミサトは笑って部屋に入ってきた。

「どうしたの？今日は帰ってくるの早くない？」

「仕事を早く終わらせたの。美魅に早く会いたくて。」

ミサトはベッドに座り、美魅に引っ付いた。

「み…ミサト？」

「仕事疲れちゃったわ。美魅に癒してもらおっかな？」

ミサトは腕を美魅の腰に手をまわす。

「やっ！？ドコ触って――。」

「美魅、“愛してる”。」

ミサトは美魅の耳を舐めた。

「ゃ…やめ…。」

力が抜けた美魅は、そのままミサトにベッドへ押し倒された。

「んっ…。」

ミサトの手が、美魅の服の中に入っていく。

「ゃ…止めて…！！今日は、ヤだ…。」

美魅は涙を流して、ミサトの要求を拒否した。

「…分かったわ。今日は止めてあげる。」

ミサトは美魅の頬にキスをすると、ベッドから立ち上がった。

「今からご飯の準備するわね。今日は、ハンバーグだから。」

そう言って、笑いながら部屋から出ていった。

「っ…く…。」

ベッドの上で、ぐったりしている美魅。

――泣いていた。

「っ…助けて…夏希。」

7、委員長

次の日。

「ん、ふわぁ…。」

夏希は目覚ましに起こされ、重たいまぶたを無理やり開いた。

「学校…。」

夏希は少し嫌になった。何故なら、美魅がいるからだ。

昨日の出来事で、夏希は美魅とどんな顔をして会えばいいのか、分からないからだ。

「うー。」

考えていても、時間だけが過ぎていく。夏希は観念して、ベッドから出た。

夏希は今、独り暮らしをしている。この町に引っ越してきたのは、夏希1人だけ。

「朝ごはん、めんどくさい…。」

夏希は台所に向かわずに、洗面所へ顔を洗いに向かった。

夏希の部屋は、簡単な造りである。
玄関を入ると、短い廊下がある。廊下を過ぎると、小さな台所があり、その奥に小さなリビング。
洗面所とトイレは廊下の途中にある。
ちなみに、お風呂は共同。男風呂、女風呂はアパートの地下にある。
家賃はなんと、月2万円。
学生の夏希にとっては、とっても嬉しい値段だ。
もしかすると、曰く付きかもしれない。

顔を洗い終わった夏希は、Tシャツとジャージの寝間着から、学校指定の紺色のズボンに履き替える。
そして、今は衣替えの季節なので、カッターシャツの上に黒のカーディガンを羽織った。

「よし。行こっ。」

今日は、水色の女物のリュックを背負い、玄関に行こうとした時だった。
夏希の部屋に、チャイムが鳴り響いた。
「お客さん…？」
夏希は首を傾げて、玄関に向かう。

鍵とチェーンを外して、扉を開けた――。

「おはよう。夏希。」

「…あれっ？」

扉の向こうにいたのは、赤い短髪の、夏希より背が高く、セーラー服があまり似合っていない、夏希のクラスメイトで委員長の、天水蛍が立っていた。

「あ、天水さん？」

「む？何をそんな驚いている？」

「だ、だって…。何でボクの家を知ってるんですか？」

「むむ？まだ知らなかったのか…。私の家は、君の隣の部屋だ。」

蛍は、夏希の隣の部屋を指差した。

「え！？」

また驚く夏希。

「夏希がこのアパートに引っ越してきた時に、私は夏希を何回か見ていたのだ。

そして、学校に行ったら夏希が転校生でいたという訳だ。

だからこの間、一緒に帰ろうと言ったんだ。」

「あ、納得しました。」

ポンッと、手を叩いて笑う夏希。それにつられて、蛍も笑った。

夏希は部屋の鍵を閉め、蛍と並んで歩く。

今日は一緒に登校のようだ。

「天水さんも、独り暮らしなんですか？」

道を歩きながら、夏希は何気ない質問をしてみた。

「うん。独り暮らしだ。

水の都高校は実家と離れていたが、どうしても行きたい高校だったからな。

親に無理を言って、独り暮らしを始めたのだ。」

「へえ～。そうなんですか。」

夏希の目には蛍が、かっこよく映っていた。

「夏希は何でなんだ？私と同じか？」

蛍の質問に、夏希はちょっと暗い顔をして、黙ってしまった。

「あ、何か言いにくい事だったか？すまない。」

「ううん。ごめんなさい。まだちょっと、人には話せないんです…。

」

悲しい目で、下を見ている夏希。

「まだ、心の整理がついてなくて…。」

「そうか、なら私はこれ以上聞かない。夏希から私に打ち明けてくれるなら、私はずっと待っているぞ。」

蛍は夏希の頭を撫でる。

夏希は女の子みたいな男の子。蛍は、ボーイッシュな女の子。

遠くから見ると、男女の立場が逆に見えた。

蛍が男の子で、夏希が女の子なら、何の不自然も無いのだ。

「やっぱり夏希は可愛いな。守ってやりたくなるな。」

クスクス笑っている蛍。

「か、可愛い！？守ってやりたい！？」

男としてやっぱり、女の子にはカッコいいって思われたいし、女の子を守りたい。

蛍の言葉に夏希は傷ついた。

「可愛いといえば、春木さんも可愛らしいな。」

蛍は何気なく言った。

「美魅ちゃん…。」

夏希は昨日の事を思い出した。

「ん？春木さんが、どうかしたのか？」

「な、何でもないです！！気にしないでください。」

「怪しい…。」

ジロッと夏希を睨む蛍。その視線に耐えきれなくなった夏希は、とっさに別の話題を出した。

「み、美魅ちゃんが男の子だったらどうします！？」

「はっ？」

ヤバい、と夏希は思った。美魅は自分が男だと隠しているはずだと思ったからだ。

だから、夏希はまた焦ったが――。

「何を言ってる。春木さんは、男の子であろう？」

「へっ！？」

蛍は当たり前のように言った。

「春木さんは男の子だと、学校にいる者全員知ってるぞ。まさか、夏希は知らなかったのか？」

「う、ううん！！知ってた！！知ってたよ！！あはは…。」

まさか、美魅が男の子だということが当たり前だったとは…。

そんな時だった、２人の後ろから大きな声が聞こえた。

「あ〝ぁあーー！！」

「えっ！？」

声は２人の後ろから聞こえたので、２人は同時に振り向いた。

「な、何で委員長が夏希と一緒にいるのよ！？意味分かんない！！」

後ろには、２人を指差して怒りで震えている美魅がいた。

「美魅ちゃん！？」

「む、噂をすれば何とやらだな。」

蛍は笑って、美魅に手を振る。

「夏希！！委員長から放れなさい！！」

「えっ…？」

「いいから来なさい！！」

美魅は夏希の腕を引っ張って、自分に引き寄せる。

「何か…デジャヴ？」

夏希は呟いた。

8、キス

「ガルルッ！！」

美魅は夏希の腕に抱きつき、蛍を威嚇していた。

まるで、蛍から夏希を守っているみたいだ。

「む、軽く傷つくな。」

蛍は美魅の隣を歩いていて、苦笑いしていた。

「うるさい！！夏希に変なことしたら私が許さないんだから！！」

「む、聞き捨てならんな。私は夏希に変なことをするつもりはない。ただ、一緒に登下校をしたいだけだ。」

ムスッと、蛍はちょっと怒った。

そんなやり取りを見ていた夏希は、恐る恐る美魅呼んだ。

「み、美魅ちゃん…。」

「何！？」

「っ、あのさ…そんなに天水さんを怒らしちゃダメだよ？」

「っ…うるさいうるさい！！いいから夏希は委員長に近づいちゃダメ！！」

「さっきからそればっかりだけど…何で？天水さんはいい人だよ？」

「っ…だって…。」

「だって？」

美魅は顔を真っ赤にして、震えた声で言った。

「夏希が、私以外の人と仲良くしてるなんて、嫌なの…。」

「っっ！！」

夏希も顔を真っ赤になってしまった。

「む、やはり2人は付き合っているのか？」

「ち、違いますよ！！」

夏希は必死に否定する。

「…。」

だが、美魅はずっと黙ったままだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「夏希、ちょっと来なさい。」

「えっ？」

学校に着いて、夏希は教室でゆっくりしていたら、美魅が夏希の目の前に現れた。

「ちょっ…待って！！」

美魅は夏希の腕を引っ張り、椅子から無理矢理立たせる。

そして、急ぎ足でどこかへ連れていこうと歩き出した。

「み、美魅ちゃん！？どこに行くの！？」

「……。」

美魅は夏希の言葉を無視して、階段を昇り始めた。

階段の先には、屋上しかない。

普段、屋上の扉は鍵が掛かっているはずだが…。

「えっ！？」

ガチャッと、普通に扉は開いた。

「ここの鍵、壊れてるのよ。覚えておきなさい。」

「は、はい…。」

美魅は夏希を連れて、当たり前のように屋上に入った。

「ふわ…。」

屋上に入った直後、優しい風が夏希を出迎える。

「うわぁ…風が気持ちい～！！」

夏希は笑顔で空を見る。

「…ねぇ、夏希。」

「あ、はい？」

美魅はギュッと夏希の腕を握り、真っ直ぐ夏希を見る。

「昨日の事…なんだけど…。」

「っっ！？」

夏希の胸がドキッとなる。

昨日の出来事が頭の中で繰り返される。

「告白の答え…昨日と変わらない？」

「…はい。」

夏希は優しく、返事をしたつもりだった。

だけど、美魅の心はまた少し傷を負う。

「やっぱり…。だけど、私の気持ちも、変わってないよ？」

美魅は、軽く夏希を後ろへ押す。

夏希の後ろは壁で、夏希は美魅に壁に押し付けられた。

「み、美魅ちゃ――」

夏希の言葉は、美魅の“唇”によって、邪魔された。

「っぅ…！？」

美魅と夏希の唇が重なる。

夏希は突然すぎて頭の中が真っ白になる。

「…。」

そんな夏希に気づいた美魅、目が意地悪な目に変わる。

「っっ！？」

夏希の口の中に、美魅の甘い舌が入ってきた。

抵抗出来なかった夏希は、美魅の侵入を許してしまったのだ。

そうなってしまったらもう遅い。夏希は美魅のされるがままになってしまう。

主導権は美魅が握ってしまった。

「っん…んぅ…。」

「はぁっ…。」

数分間、美魅は夏希の口を犯し、解放した。

「は、はぅ…。」

力が抜けた夏希は、ズルズルと石の床に座る。

「クスクス…可愛い。」

息が切れて、ハアハアと息をしている夏希を見る美魅の目は…いつもと違う、男の目だった。

「夏希…。」

美魅は座っている夏希を抱き締める。

「ゴメンね、急にキスしちゃって…。しかもディープ。」

美魅はクスクスと笑う。

「私の口の中を、夏希の味で“消毒”したかったの…。」

「消毒…？」

「ううん、何でもない。気にしないで。
それと、私の事、嫌いに…なった？」

美魅の心が、ドキドキしているのが分かった。

「そんなこと言われたら…嫌いになれないじゃないですか…。」

「クスッ…ありがとう。」

「でも、もういきなりキスするの止めてくださいね！？今度したら、本気で怒りますよ！！」

「ハイハ～イ。」

「ぅ…本当に分かってるんですか…？」

「分かってるわよ。夏希は、男の子にディープキスされて、ドキドキしている変態さんだって事。」

「なっ！？違っ…。」

「アハハハ！！」

美魅は笑って、屋上から出ていった。

「あ！！待って！！」

夏希も美魅の後を追いかけた。

9、仲良く

「一緒に食べるか？」

「へ？」

夏希と美魅が机を向かい合わせにくっ付け、昼ごはんを食べようとした時、蛍が笑顔で弁当を持ってきた。

「い、いいですけど。」

「よかった、ありがとう。」

蛍は椅子を持ってきて、座った。

「うー。」

美魅は面白くなさそうな顔をして蛍を睨む。

「またか。」

蛍は弁当を広げながら、面白そうに微笑む。

「何よ！？」

「別に私は夏希を、とって食べる訳ではないと、何回言えば分かるのだ？」

「だ、だって…。」

「そんなに春木さんが、私に夏希を食べて欲しいなら、食べてやるが？」

ニヤリと、蛍は笑う。

「だ、ダメェーー！！」

美魅は机をバンッ！！と叩いて、乱暴に立ち上がった。

「美魅ちゃん？」

「はっ…。」

教室にいる生徒の目線が、美魅に突き刺さる。

「まったく、面白い。」

クスクスと、蛍は笑う。

「いつもピリピリしている春木さんが、こんなに面白い子だったとは。」

「う、うるさい！！…トイレに行ってくる！！」

美魅は逃げるように教室から出ていった。

「…天水さん。」

「蛍と呼んでくれ。もう私達は名字で呼び合う仲ではないと思って

いる。だから蛍と呼んでくれ。」

「そうですね。じゃあ“蛍さん”。」

「フフ。私は春木さんみたいに、“ちゃん付け”じゃないんだな。」

「だって、蛍さんは“カッコいい”じゃないですか。ちゃん付けは、何故か出来ないんです。」

「フフ。カッコいい…か。」

「え？」

ちょっと悔しそうな顔をする蛍。

“カッコいい”…女の子は“可愛い”と呼ばれたいものだ。

「で、私に何か用か？」

「あ、そうでした。」

夏希は蛍に質問があるようだ。

「蛍さんって、美魅ちゃんの“友達”ですよね？」

「む？どちらかといえば、私は春木さんの“友達ではない”。」

「え？」

蛍はちょっと困ったような表情になった。

「私と春木さんは、あまり話さない。それに、春木さんがあまり人と好んで話そうとはしないのだ。」

「そうなんですか…。」

夏希は少し寂しそうな表情をしている。

夏希は密かに、不思議に思っていた。疑問に思っていた。

美魅が、夏希と蛍以外の人と喋っているところを“見たことがない”と。

美魅と出逢ってまだ3日で、完全に美魅を知っているわけじゃない。だけど、夏希は気づいた。気づいてしまった。間違いだと思いたかった。

美魅には…“友達がいない”。

そんな寂しそうな表情をみていた蛍は微笑むと、夏希の頭を撫でた。

「…蛍さん?」

「夏希が、今何を考えているのか…何となくだが分かる。」

「え…?」

「確かに、春木さんには親しい友人がいない。委員長の私には、よ

くわかっている。私だって、何回か春木さんと親しくなろうと、会話を試みたが…。」

蛍は苦笑いをして…。

「全て逃げられてしまった…。」

美魅からの、完全な拒絶。蛍はどんなに傷ついただろうか。

「だけど、私は諦めない。せっかく、“君”という、きっかけが現れたんだから。」

蛍は、撫でていた手を夏希から放して、笑顔で見つめた。

「ボ、ボク！？」

「そうだ。君が転校してきて、春木さんの表情が変わった。」

「で、でも…ボクが転校してきてまだ3日ですよ…？そんなすぐに変わるものですか…？」

「日にちなんて関係ない。必要なのは、気持ちなんだ。君には“優しい魅力”がある。それに触れた春木さんは、君に心を開いたんだ。」

蛍は、本当に嬉しそうに話す。

「それなら私も、夏希に負けてられない。私も、夏希と一緒に、春木さんと仲良くなりたい。」

夏希も何故か、嬉しくなった。理由は分からない。だけど、嬉しくなった。

「なれますよ！！蛍さんは優しくてカッコイイですから、美魅ちゃんはきっと心を開いてくれますよ！！」

「ありがとう。」

2人はお互いに笑い合った。

「あ、そうだ。」

「ん？どうした。」

「へへ～。蛍さんは、美魅ちゃんを名字で呼んでるじゃないですか。」

「うむ。そうだが…。」

「名前で呼んでみたらどうですか？仲良くなるための、最初の一歩です。」

「そう…だな。呼んでみようかな…。」

蛍の頬が、少し赤らむ。

「あ、美魅ちゃん帰ってきましたよ！！」

美魅が、ちょうど教室の扉を開いて、入ってくるところだった。

美魅の手には、ペットボトルのお茶が握られていた。
トイレに行ったついでに、お茶を買いに行っていたようだ。

「な、何よ…2人とも。私がどうかしたかしら？」

美魅は、何かしら空気が変わった2人を見て、ちょっと怖かった。

「ん、んんっ。」

美魅が席に戻ってきたと同時に、蛍は喉を鳴らした。
少し緊張している。

「…どうしたのよ、委員長？何かあったの？」

蛍の様子がおかしいのに気づいた美魅、お茶を飲みながら蛍を見ていた…――

「な、何でもないぞ“美魅タン”！！」

「ッッブッファ！！ゲボッゲーッホ！！ぬぐぅあ！！…ォェ…グホ…！！」

美魅の口から茶色い綺麗な霧が吹き出して、椅子から転げ落ち、机に頭を打って、その衝撃で机の中に入っていた教科書類が美魅の頭に落ちてきた。

「美魅ちゃん大丈夫！？」

「大丈夫か！？」

２人は驚いて美魅に駆け寄る。
クラスにいる生徒も、何が起きたのか気になって、こっちを見ている。
「み、み、美魅タン！？何！？タンって何！？タン塩！？タンタン麺！？」
「すまない、噛んでしまった。」
テヘッと、蛍は自分で頭を叩いた。
「ウザッ！！ってか、そんな噛みかたしないわよ！！アンタわざとでしょ！？」
「む、ちょっとした戯れではないか…。」
美魅はヨロヨロと、自分の席に座りなおす。夏希と蛍も笑いながら座りなおした。
「…で、何よ。」
「む？」
「突然私を名前で呼ぶなんて…。何の心境の変化？」
「うむ…それはな…。み、美魅と仲良くなりたくて…の。」
カアアと、蛍の顔が赤くなる。

いざ直球に言うと、蛍ははずかしくなってしまったようだ。

「っっ…！？な、何恥ずかしい事を言ってんのよ！？こんな大勢いる場所で…。」

美魅の顔も、赤くなった。
恥ずかしいようだ。

「む、むう…すまない。だが、今言わないと、一生言えない気がするのだ。」

苦笑いをして、美魅を見る蛍。

「もちろん、構わないよね？美魅ちゃん。」

夏希はニヤニヤと、楽しそうに笑っていた。

「そうか…アンタが根回ししたのね…。」

美魅はため息をついて、また顔を赤くした。

「わ、分かったわよ…。そこまで言われたら、仲良くしても…いいわよ。」

「そうか！！ありがとう！！」

ニッコリと、緊張が解けた蛍は、笑った。

「っっ…。」

美魅はさらに、顔を赤くさせた。

「よかったですね、蛍さん。」

「ああ。ありがとう、夏希。」

10、デパートへGO

「明日、デパートに行きましょ。」

「えっ？」

放課後、夏希と蛍と美魅の3人が一緒に帰っていると、突然美魅が笑顔で言った。

「行くのは駅前のデパートかの？」

「そうよ、さすが委員長。察しがいいわね。」

フフンと、鼻を鳴らして夏希を見た。

「で、行くでしょ？明日。」

「明日…か。確かに明日は土曜日で学校は休みですけど…。」

夏希的には、土日はゆっくりしたかったのだが。

「んー！？行かないの！？」

「行きます…。」

「フフーン、それでいいのよ。」

夏希の背中をバシバシ叩いて喜んでいる美魅。

その隣で、蛍が目を輝かしていた。

「わ、私も行ってよいかの！？」

「え？私は、そのつもりだったんだけど…。」

「本当か！？嬉しいぞ！！」

「っっ…特別なんだからね！？本当は、夏希と2人きりがよかったの！！」

すると、だんだんと美魅の顔が真っ赤になっていく。

「美魅ちゃんって、素直じゃないですよね〜。」

クスクスと笑っている夏希。

「うるさい！！バカっ！！」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

翌日、駅前。

「ふむ、美魅はどこじゃ？」

「駅前にある、噴水前って言ってましたけど…。」

夏希と蛍は、とても広い駅前の噴水の近くにいた。

夏希は、太股までの長さのジーパンを履いていて、真っ白な半袖のパーカーを着ていた。
綺麗な長い黒髪に似合っていた。
蛍はデニムのハーフパンツを履いていて、オレンジ色の半袖のTシャツを着ている。

「おーい！！コッチコッチ。」

すると、近い距離から美魅の声がした。

「あ、美魅ちゃん！！」

少し離れた場所から、美魅が駆け足で、こっちに来る。

美魅は、とても可愛い格好をしていた。

ピンクのワンピースを着ていて、可愛い女物のサンダル。長い髪を1つに纏めて、ポニーテールにしていた。

「2人とも遅い！！」

「ご、ごめんなさい。」

夏希は可愛い美魅に、ちょっと、ときめいてしまった。

「美魅は男だぞ。」

ボソッと、夏希に耳打ちをした蛍。

「わ、わかってます！！」

「ん？どうしたのよ2人とも？」

「う、ううん！！何でもないです！！」

「そう？だったらいいけど。それじゃ早速、行きましょ！！」

美魅は、さりげなく夏希の手を握り、駅前にある大きなデパートを指差した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「キャー！！これ可愛くない！？ねぇ委員長、どう思う！？」

「む、それを言うなら、こっちのほうが可愛いぞ。」

キャッキャと、デパートの中にある女の子の服屋。

美魅と蛍は、はしゃいでいた。
それを後ろから見ている夏希。男の夏希はついていけていない。
「…美魅ちゃんも男の子なのに…。」
今思えば、おかしいのだ。美魅は男なのに、何でこんなにも“女の子”なんだろうか。
美魅自身は、自分の事を男だと自覚しているのに。
「ちょっと夏希！！聞いてるの！？」
「えっ…？」
突然、美魅と蛍が目を輝かしてこっちを見ている。
「な、何ですか？」
「こっちに来なさい！！」
「え…えぇっ！？」
夏希は美魅と蛍に連れていかれた。
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
「キャー！！可愛い！！」

「うむ。」

2人はまじまじと、試着室の中を見ていた。

試着室の中には…。

「あ…あの、何か間違ってる気がするんですけど。」

顔を真っ赤にし、白いワンピースを着た、夏希が立っていた。

「うむ、夏希は今日から、“夏希ちゃん”だの。」

「な、夏希ちゃん!?ボクは男ですよ!?」

「いいじゃない、今日はそれで過ごしなさいよ。」

意地悪な目で夏希を見ている美魅。その手には、夏希の服があった。

「な、何を言ってるんですか!?ってか、いつの間にボクの服を!?返してください!!」

「返すわけないじゃない。夏希は、今日1日その格好で過ごすのよ。」

「グッショブじゃ、美魅!!」

横で幸せそうに見ている蛍。一番喜んでいるように見えた。

「さっき、2人で服を選んでいたのは、この為だったんですね…。」

「そうよ、もうお金払っちゃったし。」

自慢気に胸をそらす美魅。

「えぇっ！？払っちゃったんですか！？」

「観念なさい！！」

「嫌だー！！」

デパートに、夏希の叫び声が、響いた。

11、救世主は……

「ほら、早く！！　“夏希ちゃん”」

「ぅ……うぅ」

「可愛いぞ、夏希」

3人は今、デパートにある、ゲームセンターに来ていた。勿論、夏希は女装をしたまま。

「こっちに新型のプリクラがあるのよねー」

夏希と違って、軽い足取りでゲームセンターの中を歩く。

「ぷ、プリクラ！？」

「そうよ、しかも全身撮れるやつ」

ニヤニヤと笑っている美魅。夏希後ろでは、蛍もニヤニヤしている。

「あー！！　あったあった、これこれ！！　ほら、2人とも早くしなさい！！」

美魅は目的のプリクラ機を見つけてはしゃいでいる。

「ちょっと、やっぱり待って下さい！！　せめて、今日着てきた服に着替えてからにしてください！！」

夏希は最後の抵抗を見せるが……。

「何言ってんのよ。それ着てないと意味無いじゃない」

「意味無いって……蛍さんも、何か言ってくださいよ」

夏希は蛍に助けを求めるが。

「金なら私が払ってやる。安心するのだ」

蛍はグッと、親指を上げて微笑んだ。

「何が安心なんですか。鼻血出てますよ」

「む、すまない。ついつい興奮してしまって……」

「……帰ります」

身の危険を薄々感じ始めた夏希は、ゲーセンから出ていこうとした。

「まぁまぁ夏希ちゃん。女同士、仲良く撮ろうよ！」

「ボクと美魅ちゃんは男の子です！」

「うるさいなぁ……。まだぐちゃぐちゃ言うんだったら、女装姿の夏希ちゃんの写メを、ネットに流すよ！？」

「いつ撮ったんですか！？」

「えっ？　今」

パシャッと、シャッター音が響いた。

「……めんこいのぅ」

鼻血を滴ながら、携帯のカメラで夏希を撮る変態もとい、蛍の姿がそこにはあった。

「うわぁぁ！？」

夏希は急いで蛍の携帯を奪いに行くが……。

「送信」

「へっ！？」

動きが止まった夏希の後ろで、美魅の携帯が鳴った。

「うん、やっぱり可愛いわ」

美魅は携帯の画面を見てニヤニヤしている。

「THE・流通！」

唖然としている夏希の肩に、ポンッと、優しく蛍の手が置かれた。

「うわぁぁあぁぁ！！」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「はぁ……」

夏希はまだ女装をしたままで、プリクラの近くにあるベンチに座っていた。

結局、夏希は2人と一緒にプリクラを撮るハメになった。

今思えば、写メを撮られるのとプリクラを撮るのは、画像が残るので、夏希は更に首を絞められたのでは……。

あの2人は今、プリクラの落書き機能で、落書きをしている最中だった。

なにやら、更に不吉な予感がするが、気のせいにした。

「はぁ……」

もう一回、夏希はため息をついた。そんな時だった……

「ねぇねぇ、君1人で何してるの〜？」

「えっ？」

うつむいていた夏希は、知らない声に声をかけられたので、顔を上げた。

そこには……。

「うっ……」

「おぉ、マジ可愛いじゃん」

「声かけて正解っしょ？」

チャラチャラした格好の、男性が４人……夏希を囲んでいた。

……絡まれた。

「君名前は？」

「な、夏希……です」

「夏希ちゃんかー、可愛いねー。どう？　１人ならさ、俺らと遊ぼうぜ」

「えっ……あ、違っ……」

「ほらほら、早く！」

グイッと、夏希は腕を掴まれて、強制的に立たされた。

「い、痛っ……」

「何処に行こっか～？」

「とりあえず、俺の車でどっかに行くべ」

「いいねー」

“車”という単語に、夏希の背筋がゾクッと反応した。

コイツらの車に乗れば、とんでもない事になってしまうと、心の何処かで叫んでいた。

「ほら、行くよ〜」

男は夏希を引っ張り、無理矢理歩かせる。

「や、やめて……」

夏希は抵抗しようとしたが、チャラチャラした男の力の方が強い。

夏希はそのまま呆気なく、ゲーセンから出てしまった。

「駐車場って何処？」

「あっちじゃね？」

もうそろそろ、後戻りが出来ない状況になってきた。

こうなったら、“助けて”と、大声で叫ぶしか……――

「あ、あー……こんな所にいたんやな。捜したでー……」

「あぁ？」

ひょこっと、おどおどしながら男達の中に入ってきた1人の人物。

黒い野球帽を深く被り、顔が少し分かりにくい。

背は夏希より頭ひとつ分高い。

声だけでは、男か女か分からない声だった。
ダボダボのジャージをだらしなく着ていて、一見不良に見えるが、雰囲気が弱々しい。

「ほな行くで。今から買い物するんやろー？」

「えっ……あ……」

野球帽を被った人物は、夏希の手を優しく握り、そのまま男達から連れ去った。

「チッ、何だよ……男連れかよ。つまんねぇ」

「先に言えよな、胸くそ悪い。リア充なんか爆発しちまえ」

男達は案外呆気なく夏希を諦め、何処かへ行ってしまった。

「あ、あの……」

夏希はまだ胸がドキドキしていて、落ち着いてないない。しかし、助けてくれた見ず知らずの人に、お礼をしたかった。

だが、野球帽を被った人は、夏希の方を見ずに、夏希の手を引っ張り、ツカツカと歩いている。

すると、突然……野球帽を被った人は、デパートのあちらこちらに設置されたベンチを見つけるやいなや、夏希の手を放して……座った。

「ハーッ……」

「えっと……あの……」

野球帽を被った人は、ぐったりと疲れたように、背もたれに身を任せた。

夏希は、野球帽を被った人の前に立ち、オロオロとしている。
お礼を言いたいが、何やら言えない状況のような気がした。

だが、夏希はグッと覚悟を決めて……言った。

「あ、あの！　助けていただいて、ありがとうございました！」

夏希は頭を下げる。
フルフルと、身体が何故か震えていた。おそらく、まだ先程の恐怖が消えてないのだろう。

すると……。

「……お嬢ちゃん。名前は？」

「えっ……」

夏希は思わず顔を上げてしまった。
野球帽の人は、夏希に微笑み、優しく見つめていた。

「な、夏希です……。雨宮　夏希です」

「夏希ちゃんか、いい名前や。あ、ウチの名前は“白木（しらき）　竜也（たつや）”や。

普通に、竜也って呼んでくれて構わんよ～」
今度はニコニコと笑い、緊張している夏希を落ち着かせた。
「ほらほら、そないな所に突っ立ってやんと、ここに座り」
竜也は、自分の隣の空いたスペースをポンポン叩いた。
「は、はい！」
夏希は竜也の隣にちょこんと座る。
思わず夏希の顔が、笑顔になった。
「夏希ちゃんは、何歳なんや？」
「１６歳です。竜也さんは……？」
「ウチは１８や。この近所の、“水の都高校”に通うとる」
「えっ！？　竜也さんもですか！？」
「ってことは……夏希ちゃんもか？」
「はい！」
先程の恐怖も何処かへ行ってしまい、心には嬉しさと喜びで溢れていた。
「ははっ、奇跡に近い偶然やなぁ」

「ふぁ……」

ポンッと、竜也は夏希の頭に手を置き、軽く頭を撫でた。

「っっ……」

竜也に頭を撫でられた夏希は、何故かドキドキしてしまっていた。
それに、顔も熱い……。

「ん？　どないしたんや？」

竜也は、様子がおかしい夏希を心配して、顔を覗きこんだ。

「な、な、なんでもないです！」

「そぉか？　でも、顔赤いで？　風邪ひいたんとちゃうか？」

すると、突然竜也は……夏希に顔を近づけた。

「へっ？」

夏希が理解するまで、少し時間が掛かった。
竜也は、自分の額と夏希の額を……くっつけた。
鼻先が互いに当たり、視界のほとんどが竜也だった。

「うーん……熱はないなぁ」

「っぁ――っ！！」

声にならない声が、夏希の口から出た。

更に顔は真っ赤になっていく。
そして、ドキドキも止まらない。
このままでは、竜也にドキドキしてしまっていることがバレてしまう――

「ごら〝ぁぁぁぁ！！」

「んっ？」

“私の”夏希に何してんだぁぁぁ！！」

竜也の背後から怒号と殺気。
そして――

「――っごぶっ！？」

突然、誰かに首根っこを掴まれ、ものすごい力で夏希から引き離され、ベンチから引きずり落とされた。

「いっつつ……な、何やねん！　いきなりけったいなことしやが……って……」

地べたに腰を強打し、痛みで腰を擦りながら、竜也は後ろを振り返った……。

「けったいな？　私には貴方がけったいな人間に見えるんだけど？　気のせいだといいなぁ……ねぇ？」

竜也の背後に立っていたのは、どす黒いオーラを纏いし、鬼のような形相で竜也を睨む、美魅がいた。

「み、美魅ちゃん！？」

夏希はようやく我に返り、状況を理解した。

「もう大丈夫じゃ。安心せい、夏希」

すると、突然夏希の肩に、ポンッと手が置かれた。

「蛍さん！？」

夏希の後ろから現れたのは、蛍だった。

「すまぬ。夏希を1人にするべきでは無かったな……。まさか、このような輩に絡まれるとは」

蛍は、竜也を穢いものを見るような目で見下していた。

「さぁーて……私の夏希に手ぇ出そうなんて、いい度胸のある獣を、どう料理しようかなぁ……」

美魅の目が、血走っていた。

「ひ、ひゃぁぁぁ！！」

竜也はガクガクと身体を震わせ、美魅を完全に恐れている。

「ま、待ってください！　違います！」

「え？」

夏希の一言に、蛍と美魅は首を傾げる。

「竜也さんは、ボクが変な男達に絡まれてた所を、助けてくれたんです！」

「そ、そうなのか……？」

蛍は、少し驚いた表情で竜也を見た。

「せや！　ウチは、夏希ちゃんを助けたんや！　夏希ちゃんを絡んでたなんて、濡れ衣や！」

少し怒りを見せた竜也。

竜也はフラフラと、立ち上がった。

「大丈夫ですか？　竜也さん」

夏希は蛍から離れて、竜也に駆け寄る。

「おう、大したことあらへん。ありがとな、夏希ちゃん」

竜也は、夏希の頭を撫でた。

「ちょっと……竜也さん……恥ずかしいです」

「そうなんか？　カハハ、夏希ちゃんは可愛いなぁ」
「か、可愛いくないです！」
イチャイチャしているようにも見える2人。
そんな2人を面白くなさそうに見つめる1人の人物。
「なにこれ……どうしてこうなったの？」
「……美魅？」
美魅の目に、光が無い。
隣で美魅を見ていた蛍が、美魅を見て少し恐怖を覚えた。
「ムカつく……ムカつく……！」
美魅は怒りながら竜也にズンズンと近づいた。
「ちょっとアンタ！」
「ん？　なんやぁ？」
「この私の目の前で、帽子を被るな！　調子に乗るな！　脱げ！」
パシンッと、美魅は竜也の帽子を叩き落とした。
「っっ……！？」
帽子は呆気なく竜也から離れ、床に落ちた――

「……えっ！？」

この場にいた人間は、思わず驚きの声を漏らしてしまった。

まるで、小さな帽子の中に封印されていたが如く、“綺麗な金色の長い髪”が、現れた。

「た、竜也さんって……」

夏希達の目の前に立っている竜也は、先程の竜也ではなかった。

まず目につくのは、綺麗な金色の、長さが肩まであるサラサラした髪。

水色の綺麗な瞳。

美白で柔らかい肌。

どこからどう見ても、女の子だった。

12、憧れ

「ウチは、ハーフやねん」

デパートの中にあるファミレス。
よくあるような内装だった。

4人はそこにいた。
4人座れるテーブルとイス。

美魅は夏希の隣に座り、向かい側に、竜也と蛍が座っている。

「おじいちゃんが日本人、おばあちゃんがアメリカ人。その2人から生まれたのが、親父。んで、親父はアメリカ人の母ちゃんと結婚したんや」

竜也はドリンクバーのジュースを飲みながら言った。

「よう分からん家系やろ？」

竜也はニヤニヤと笑っている。

「そ、そんなことないですよ！　ちょっとビックリしましたけど……。それに、竜也さんは……き、綺麗ですから！」

「カハハ、何や突然。おだてても、何も出やんで？」
「おだててなんかないですよ！　本当のことを言ったんです……」
「口うまいなぁ、夏希ちゃん。女の子からモテモテやろぉ？」
「そんなことないです……！」
ずっと夏希のことを女の子だと思っていた竜也に夏希は、竜也に自分は男だと打ち明けていた。
ついでに、美魅も男だと打ち明けた。
なかなか信じてくれない竜也に、信じてもらうのに時間がとても掛かった。
ちなみに、まだ夏希は女装をしたままである。
「しかし、竜也先輩……なぜそのような格好をしておるのですか？」
蛍はずっと気になっていた。
「なぜって……何でそう思うんや？」
「いや……それは、そのような綺麗な容姿をしておるのに、わざわざ姿を隠すような格好をしていれば、気にもなりますよ」
「カハハ、やっぱりな。言う思たわ」
竜也は帽子を深く被り、ため息をついた。
「ウチ、こんな性格やから、外見と中身にギャップがありすぎて、

嫌やねん」

すると突然、夏希と美魅を見つめた。

「な、なによ！？」

美魅は竜也を睨んで、夏希の腕に抱きついた。

「いや……ウチな、男に生まれたかってん。せやから、夏希ちゃん達……男の子に憧れてんねん」

「だから、男の子みたいな格好をしているんですか？」

夏希は真っ直ぐ竜也を見つめて、竜也を理解しようとしている。

だが、この中で一番、竜也を理解が出来るのは……。

「せや、この格好やったら、誰もウチのことを気にかけん。注目もされへんのや」

竜也は笑っていた。

しかし、その笑顔の裏側では、いったいどれほどの苦労があったのだろうか。

本当の自分を出せずに、変装することにより、身を守ってきた。

「ぼ、ボクは構いません！」

「夏希ちゃん……？」

夏希は頬を赤らめて、竜也を見つめる。

「ボクは、竜也さんの本当の姿が好きです。だから、ボクと一緒にいるときは、本当の竜也さんでいてくれて構いませんから！」

まるで、愛の告白みたいだ。

そして、夏希の言葉を聞いている美魅が、どんどん不機嫌になっていく。

「カハハ、嬉しいこと言うてくれるやないか夏希ちゃん。お姉さん、惚れてまうわ」

「……つっ」

竜也の何気ない冗談に夏希は、また顔が赤くなった。

冗談だと分かっていたが、何故か胸がドキッと、熱くなった。

「馬鹿じゃないの？」

「み、美魅ちゃん！？」

突然、美魅は竜也を見下すように睨み付けた。

「さっきから黙って聞いてたら、勝手にベラベラベラベラと……腹立つ女ね」

「ちょっと美魅ちゃん！　何を言ってるの！？」

「夏希は黙ってて！」

「っ……」

美魅の睨みに、怯む夏希。
夏希が黙ったのを確認した美魅は、あらためて竜也を睨み付ける。
「アンタ、ムカつくのよ……。夏希をヤンキーから助けたからって、夏希に馴れ馴れしく喋っちゃってさ……。調子に乗んないでくれない？」

美魅は気に入らなかった。
夏希が自分以外に笑顔を見せている事が……。自分以外の人間に、今まで見たことない、眩しい笑顔を見せている事が……。
そして何より、竜也が“綺麗な女性”だということが。
気に入らなかった。

女性であるということは、夏希がいつか、竜也に恋愛感情が生まれてしまうかもしれない。

自分は“男”だから……どんなに着飾ろうが、どんなに女らしくしようが、“男”なのだ。

だから……“気に入らない”。

「カハハ！」

「な、何が可笑しいのよ！？」

美魅の挑発に、竜也は笑っていた。怒りも、戸惑いも感じず、笑っていた。

「カハハ、美魅ちゃんも可愛いなぁ。よっぽど夏希ちゃんを、とら

れたくないんやね～」
「っっ……！」
美魅は図星を言われて、顔を真っ赤にさせた。
「安心しぃや、夏希ちゃんは美魅ちゃんのモノやで。カハハ！」
「っ……！？　竜也さん！　何を言ってるんですか！？」
「お似合いやで、お二人さん」
竜也は笑って、立ち上がった。
その手には、伝票。
竜也は伝票をヒラヒラさせて言った。
「んじゃ、ウチ帰るわ。楽しかったでー。あ、ここのは奢っちゃるわ～。先輩やからね」
「あ、竜也さん！　待ってください！」
夏希は席を立ち上がり、竜也の後を追った。
「美魅ちゃん、蛍さん、今日はありがとうございました！　また学校で！」
夏希は笑顔で頭を下げ、すぐに竜也の後ろを着いていった。
「あ、夏希……！」

美魅は、夏希を追おうとしたが、何故か身体が動かなかった。
まるで……美魅は竜也と夏希の仲に入り込めない……そんな気さえした。

「美魅？」

様子がおかしい美魅に、蛍は心配していた。

「何よ……夏希の奴……今日会ったばっかりの女に軽々着いていって……」

落ち込んだ表情。
独りぼっちになったような顔。
今にも泣き出しそうな……。

「心配するな美魅。竜也先輩は悪い人じゃない」

「分かってる！」

「じゃあ、何故そのような顔をする？」

「……分かんない……分かんないの！　何かムカムカして、イライラするの！　……あの女、嫌い！」

「むぅ……」

竜也に夏希を捕られるのではなく、夏希が竜也を好きになってしまう可能性がある。
そうなってしまったら……夏希は美魅を見なくなってしまう。
夏希と一生、繋がることはない。

それが、不安だった。
嫌だった……。
「帰る……！」
美魅は荷物を荒々しく持ち、ファミレスから出ていった。
「むぅ……困ったのぅ。ああなってしまったら、機嫌がなおるのに、時間がかかって……」
蛍は頭を掻いて、うーんと困っていると、視界の端に何やら見覚えのある物が映った。
「っ……これは！？」
美魅が座っていた席に、“夏希の服”が置き忘れられていた。
「あ！　夏希のやつ……女装したまま竜也先輩を追いかけてしまったのか……。美魅も美魅で、怒りでそのことを忘れおって……」
蛍は2人に対してため息をついた。
「夏希の家が隣で良かった……今晩、届けてやるか」
蛍も、夏希の服を持ち、ファミレスから出ていった。
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「夏希ちゃんの家は何処や？」

「駅から歩いて、数分ですが……何でですか？」

竜也と夏希は、駅の周辺にいた。
仲良く歩いている。

「また悪い奴らに絡まれたらアカンやろ？　家まで見送ったるわ」

「そ……そんな、悪いですよ！」

「何言うとんねん、そんな格好しとったら、また絡まれんで？」

「うっ……」

夏希は、竜也に言われるまで女装していることを、忘れていた。
急いで服を取りに行こうとしたが、蛍から、今日の夜に家に届けに行くと、メールがあった。

夏希は今すぐに、手渡して欲しかったが、竜也に迷惑をかけれないのと、2人っきりになりたいという気持ちがあった。
だから夏希は、このまま帰ることにしたのだ。

「でも……わざわざ家まで……迷惑じゃないですか？」

「迷惑やったら、こんなこと自分から言うか？」

「い、言わないです……」

「じゃあ、そう言うこっちゃ」
竜也はニヤニヤと、夏希の隣を歩く。
「竜也さん……優しいですね」
「ん？　そおか？」
「だって……不良からボクを助けて、ファミレスも奢ってくれて、更には家まで送ってくれるなんて……優しすぎます」
夏希の胸の高なりが、どんどん大きくなっていく。
「あの……竜也さん。これからも、ボクと仲良くしてくれますか？」
火照った表情で、竜也を見つめる夏希。
そんな夏希をまともに見てしまった竜也は……。
「っ……な、夏希ちゃん？」
竜也は、胸がドキッとしてしまい、簡単な答えを言うタイミングを逃してしまった。
「やっぱり……ダメですか？」
驚いている竜也を見て、目に涙が溢れてきた……。
今の夏希は、心が弱くなっている。
小さな女の子みたいな心……シャボン玉よりも弱い心になっている。
「い、いいに決まっとるやろ……！　夏希ちゃんみたいな、可愛ら

しい子と仲良くなれるなんて、こっちからお願いしたいくらいやで！　カハハッ！」

「っ……嬉しい……です」

「カハハ！　なんや、夏希ちゃんホンマに女の子みたいやなー」

竜也は夏希の頭を撫でた。
ワシャワシャと、少し荒っぽく撫でた。

いつもは、女の子扱いされるのが嫌いだった夏希。しかし、竜也にそんな扱いをされても、嫌じゃなかった。
むしろ……可愛らしいと言われて、嬉しかった。

2人はしばらく歩き、夏希の住むアパートに着いた。

「あ、ここです」

夏希はアパートを指差した。

「“翠月荘（すいげつそう）”……か、何か凄いアパートやなぁ」

「家賃が安くて、安いのに中がとても綺麗なんですよ」

ニコニコとしている夏希。
ここが、とても気に入っているようだ。

すると……。

「あー！　夏兄ぃ！！」

ダダダッと、後ろから夏希達に向かって足音が聞こえた。

「お帰りぃ！」

「ぅわっ！？」

夏希が振り返った瞬間、夏希の胸の中に、夏希よりも少し小さな人が飛び込んだ。

「夏兄ぃ～……うにゅー」

夏希の胸の中に飛び込んできた子は、女の子だった。
セーラー服を着ていて、半袖から飛び出すように出ている細い腕や、スカートから出た細い足。
長さが首まである茶色の髪。

背中には、テニスバックを背負っている。

「さ、桜（さくら）ちゃん？」

「夏兄ぃ～……いいニオイがする～」

「うぅ……ニオイなんて、嗅がないで……」

「その子は……？」

まだ驚いている竜也は微笑んで、夏希に質問した。

「あ、すみません。この子は、翠月荘の大家さんの、娘さんなんです。ほら、桜ちゃん。この人は、ボクの学校の先輩」

「先輩……？　ってことは、夏兄ぃの、友達？」

「うん。そうだよ」

それを聞いた桜は、夏希から離れて、竜也の前に立った。

「はじめまして。水の都中学校二年生、花葉（はなば）　桜（さくら）っていいま～す」

ペコッと、頭を下げる桜。

竜也も頭を下げる。

「ウチは、白木竜也。こう見えて、一応女や」

「じょ、女性！？」

桜は目を丸くして、口をポカーンと開けた。

「カハハッ！」

竜也は、桜の反応に少し気持ち良さそうに笑っていた。

「てっきり、夏兄ぃの彼氏かと……」

「ちょっ……桜ちゃん！？」

「だって夏兄ぃ……そんな格好してるから、とうとう女の子に目覚

めたのかなぁって……」

「違っ……これは友達に無理やり……」

「はいはーい。お話は、後でじっくり聞くからねぇ。早く家に入ろーよー。格ゲーして遊ぼ～！」

グイグイと、夏希の腕を引っ張る桜。

「カハハ、夏希ちゃんはモテモテやなぁ。ほな、邪魔者は退散するわ」

「あ、すみません竜也さん。ここまで送っていただいて……」

「えぇよーん。ほな、また月曜日に会おなー」

竜也は手を振って、夏希達に背を向け歩き出した。

「竜也さん、今日は本当にありがとうございました！」

夏希の声に、竜也は手を挙げ、そのまま帰って行った。

夏希は、竜也の背が見えなくなるまで、ずっと見ていた。

13、恐るべし

――“休み”。

夏休み、冬休み、春休み。
ゴールデンウィーク、祝日、連休、土日。
台風で休校。学校創立記念日。

休みなんて、大嫌い。

友達もいない人にとっての休日は、ただただ孤独なだけ。

前の“私”には友達がいなかった。
だから、休日は家にいるしかない。家以外に、居場所なんてないから。
家には、家族が1人だけいる。

“依存”という名の家族。
互いに互いを依存し、穴から抜け出せない。

もはや、家族とは呼べない関係……。

そこに救いも、堕落も無い。

あるのは……歪んだ愛だけ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「……暑い」

夏希が住むアパート。
夏希の部屋の窓の外から、サンサンと太陽の光が照りつけている。
部屋の温度、３０℃。

「……うきゅぅ……」

夏希はベッドで寝ていたが、耐えきれなくなってベッドから出た。

今は7月。
そろそろ夏が本番になってきていた。
そして、今日は日曜日。
今日何も用事がない夏希は、昼まで寝ようとしていたが、あまりの暑さに朝の１０時で断念した。

「うぁ……汗でベトベト……」

夏希の部屋は、風通しは悪くないのだが、太陽の光がまともに入ってくるので、熱がこもりやすい。

「シャワー浴びたい……」

夏希はタンスから、バスタオルと着替えを取り出した。

「お風呂場に行こ……」

アパートの地下には、広いお風呂場がある。

実はこのアパート、地下のお風呂場を“銭湯”として、一般人にも開放してある。

ちなみに、アパートの住人は、無料で使うことができる。

夏希は、急ぎ足で部屋からでた。

そして、部屋の鍵を閉め、急いでアパートの地下へと歩む。

早く汗を流して、スッキリしたいのだ。

アパートのど真ん中に、地下への入り口がある。

両開きの引き戸があり、今は“湯”の文字が書かれた暖簾がかけられていた。

朝の８時～１１時、夕方の１７時～２１時まで一般開放している。

アパートの住人は、大家さんが起きていたら、許可さえ貰えばいつでも使うことが出来る。

「あ、夏兄ぃ！」

引き戸を開けようとした、その時だった。

後ろから幼い声がした。

夏希が振り替えると同時に、夏希の胸の中に……桜が飛び込んできた。

「さ、桜ちゃん……！？」

「うにゅぅー……おはよう夏兄ぃ。今日も暑いね～」

と言いながら、ギュッと夏希を抱き締めている。夏希の胸に頬擦りしていて幸せそうな顔だ。

「えぇっ！？　暑いなら離れなよ！」

「暑いけど、夏兄ぃは別腹なのだ！」

「意味わかんないよ！　ほら、ボク今、汗臭いから、離れたほうがいいよ」

夏希は優しく桜を離れさせようとしたが……桜は更に力を強くさせた。

「こ、コラ……桜ちゃん」

「臭い……夏兄ぃの汗……」

「えっ？　何か言った？」

「ううん……何でもなーい」

少し顔が赤い桜。

夏希の言う通り離れたが、今度は夏希の腕に抱きついた。

「夏兄ぃ、今からお風呂に入ろうとしてた？」

「うん、寝汗でベトベトだからね」

「だったらねー、桜の家に来なよ！」

桜は夏希の腕をグイグイ引っ張る。

桜の家は、翠月荘の目の前に建っている一軒家。

大家さん一家は、この家に住んでいる。

ちなみに、桜の家庭は、大家さんである桜の母、娘の桜、桜の祖母が住んでいる。

桜の父親は、桜が産まれてすぐに亡くなっている。

「桜ちゃんの家に……？」

「だって今ね、近所のおじいちゃん達で、いっぱいなんだって、おばあちゃんが言ってたの。ゆっくり入れないよ？」

「えっ……そうなの？」

少しがっかりする夏希。

今の時間帯は、人が少ないと思って来たのに……。

「だからー、夏兄ぃだけ特別。桜の家のお風呂使っていいんだよー」

「本当に？　でも……大家さん怒らない？」

「大丈夫ー。お母さんもきっと喜んで、夏兄ぃに貸してくれるよ！」

「うん、じゃあ……お言葉に甘えちゃおっかな」

「やったーっ！　えへへ。夏兄ぃ、お風呂から上がったら、遊ぼうね！」

「うん！」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「おはようございます。大家さん」

「あららー、夏希さんなのー」

桜の家に入ると、桜の母親であり、翠月荘の大家さんの、花葉（はなば）紅葉（もみじ）が出迎えてくれた。

背が高く、ホワホワした雰囲気のある女性。

三十代後半で、一児の母……とは思えない容姿である。

十代と言われても、信じてしまうほどである。

むしろ、十代にしか思えない。

「あらー、大家さんだなんてー、他人行儀ですの。紅葉って呼んでくださいって言ってるのー」

「う……でも、ボクより年上ですし……」

「年上とか関係ないの。それに私は、夏希さんと仲良くなりたいのー。だから、名前で呼びあったほうが、早く仲良くなれると思うのー」

「は……はい……」

目の前にいるのは年上なのだが……まるで子供と相手しているみたいな、不思議な感じがした。

「お母さん！　そんなことより、夏兄ぃに早くお風呂を使わしてあげてよ！」

「あらら、そうでしたのー。夏希さん、こちらなのー」

紅葉は夏希の前を歩き、お風呂場へと案内した。

「すみません、ありがとうございます」

夏希は紅葉の後ろを着いていった。
その後ろで、桜が別の部屋に入り、タンスを漁っていたことは、夏希は知るよしもなかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ではではー、ごゆっくりしていいのー」

「あ、はい。ありがとうございます」

脱衣場。

紅葉は、脱衣場に夏希を案内し、脱衣場の扉を閉めて出ていった。

「ふぅ……さて、汗流そーっと」

夏希が、汗で汚れたTシャツを脱いで、上半身裸になったときだった。

「……何してるの？」

「――！？」

閉められたはずの扉が、数センチ開いていた。そして、その数センチから感じる視線。

桜が、覗いていたのだ。

「ち、違うんだよ！」

見つかったとたんに、桜は扉を勢いよく開け放った。

「こ、こら！　桜ちゃん！」

夏希は思わず、服で上半身を隠してしまった。

相変わらず、女の子のような反応をしてしまうようだ。

脱衣場に入ってきた桜。

片手には、下着やらジャージやらの、着替えを持っていた。

「別に夏兄ぃの裸が見たくて覗いてたんじゃないんだよ！　夏兄ぃとお風呂に一緒に入りたくて、タイミングを図ってただけなんだよ！　裸を見たいからじゃないんだよ！　裸を――」

「……桜ちゃん？」

「はっ……！　夏兄ぃのバカ！」

「何で！？」

桜の顔は恥ずかしさで真っ赤だった。思春期の女の子は、難しいのである。

「とにかく……夏兄ぃ、一緒に入ろう？」

「……ダメ」

「えぇっ！？　何で！？　ピチピチの女子中学生とお風呂に入れるんだよ！？　男の夢じゃないの！？」

「だっ……ダメっ！　何てことを言ってるの！？　桜ちゃんは中学生でしょ！？　中学生の女の子は、自分より歳上の家族以外の男性とお風呂に入っちゃダメなの！」

「やだ！　何その決まり、意味わかんない。っていうか、お母さんから許可貰ってるもん！」

「えっ！？」

「“仲良く入ってきなさいなのー”って言ってくれたもん！」
「大家さん……」
大切な娘を任せるほど、夏希は紅葉に信用されている証拠である。
「大家さんが、良いって言っても、ボクがダメなの！」
「ふーん……」
桜が突然、何やら悪いことを考えたような目をした。
夏希は、何故か美魅を思い出した。
「な……何？」
「ここ、桜の家のお風呂なんだよ？　夏兄ぃには、拒否権無いんじゃないのかな？」
ニヤリと、悪そうな顔をして、夏希の目の前に立った。
勝った、そう思った桜。しかし、夏希はその上をいく男だと、桜は知らなかった。
「……じゃあ、お風呂上がってから、桜ちゃんと遊んであげない」
「っみゃぁ！？」
プルプルと、震える桜。
「権利を振り回して、ボクとお風呂に入るって言うなら……ボクに

も考えがあるんだよ？」
今度は夏希がニヤリと笑った。
「ず、ずるい！　夏兄ぃのバカ！」
「ふふん、高校を舐めちゃダメだよ～」
夏希は桜の頭を撫でて、桜の背中を押して、脱衣場から追い出した。
「ボクが出たら、お風呂に入っていいからね」
「……本当に？」
「うん。約束」
「分かった……」
桜は脱衣場から出て行った。
そして、扉を閉める。
「“約束”だよ……」
桜は、笑っていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ぷふぁぁ……」

花葉家のお風呂は、大人の男性が３・４人余裕で入れる広さだった。
綺麗で、いい匂いがした。

夏希はシャワーで汗を流し、頭や身体を洗い終えていた。

洗い終え、すっきりした夏希。
無意識に笑顔になっていた。

「んー……」

夏希は鏡に映る自分が、ふと視界に入った。

夏希が気になっているのは、夏希の特徴である、黒く綺麗で長い髪。
そろそろ長さが、腰まで届いてしまう。

「……伸びてきたなぁ。夏だし、バッサリ切っちゃおかなぁ……」

夏希の白い肌に、黒く綺麗で長い髪。夏希にとても似合っている。

「でも……前に竜也さんが、この髪を綺麗だって言ってくれたっけ……」

学校に居るとき、夏希は暇さえあれば、ほとんど竜也に会いに行っている。
竜也は最初、戸惑ってはいたが、今では可愛い後輩が自分を慕って

くれるので、受け入れている。
ちなみに、美魅や蛍も、夏希にくっついて着いていっている。
これも、竜也は喜んで受け入れている。
「……竜也さん」
最近、夏希は自分が変だと思っていた。竜也のことを想うだけで、胸がギュッと締め付けられるのだ。痛いのだが、何故か嬉しさも感じる。
「……明日、竜也さんに聞いてみよっかなぁ……」
夏希は、鈍感なのだ。
「っよし、スッキリしたし、出ようっと」
夏希は立ち上がり、お風呂場の扉を開けた……。
「夏兄ぃ！」
「にゅわぁぁぁ！？」
扉を開け、お風呂場から一歩出た瞬間、待ち構えていたか如く、夏希の胸に桜が飛び込んできた。
桜は……――
「桜ちゃん！？　な、何で裸なの！？」

一糸纏わぬ姿だった。

「桜もお風呂に入るー！　夏兄ぃ、背中流してー！」

さすがに中学生の女の子と、裸で抱き合うのは、世間体としてアウトである。

しかし、桜は離れようとしない、更に抱き締めてくる。

「だ、ダメって言ったでしょ！」

「えーっ……だって、夏兄ぃが“お風呂から出たら、お風呂に入っていい”って言ってたよね？　今さっき“出た”でしょ？」

ニヤリと、笑った桜。

たしかに夏希は、一歩だが外に出た。

夏希が一歩外に出たら、桜はお風呂に入れる。

「約束だよ？　約束は守ってくれるよね？」

「一緒に入るとは言ってないぃぃ……――――――

結局、２人仲良くお風呂に入ったとさ……。

２人仲良くお風呂に入っている時に、夏希の携帯が着信でブルブル震えていたことに、今の夏希には知るよしもなかった。

１４、地獄の電話

「着信……２９件」

夏希は風呂上がりに携帯を開き、唖然としていた。

「メール……１５８件……」

さらに唖然とした。

そして、背筋に悪寒がはしった。

夏希は今、花葉家のリビングにいた。お昼ご飯をご馳走してもらえるようだ。

大きなフカフカのソファーに座っている夏希の膝の上には、桜が満足した表情をしながら、夏希の膝を枕にして猫みたいに寝転がっていた。

「ブーッ、夏兄ぃ、さっきから携帯いじってばっかり！」

「あ、ゴメン……ちょっと気になっただけだから……」

夏希は着信とメールの主を確かめずに、携帯をポケットに入れた。

「いいなぁ……携帯」

「そう？」

「桜も欲しいなぁ」

桜はまだ携帯を持つことを、許されてなかった。

「おかーさーん！」

桜は起き上がり、台所にいる紅葉に叫んだ。

「何なのー？」

ダイニングキッチンなので、紅葉の姿がよく見える。

「桜も携帯が欲しい！」

「ダメなのー。まだ桜は中学生、携帯を持つのはまだ早いのー」

「でも、友達は皆持ってるんだよ！？」

「他所は他所、家は家なのー」

「何それ！？　古いよ！　携帯があれば、夏兄ぃと離れてても話せるのに……」

「……離れてても……なの？」

ピカッと、紅葉の目が光ったように思えた。

「分かりましたの。桜に携帯を買ってあげますの」

「ホントっ！？　やったぁ！」

桜は両手を挙げて喜んだ。

「そんなに簡単に許していいんですか……？」

夏希は台所にいる紅葉に訪ねる。

「娘を影から応援するのは、親の役目なの」

「は……はぁ……？」

夏希は意味が分からず、しかし、紅葉が桜の事を大切に想っているのは、分かった。

「携帯買ってもらったら、夏兄ぃの連絡先を最初に登録するんだー」

再び夏希の膝の上で甘えだした桜。夏希は優しく微笑み、桜の頭を撫でる。

「うん。桜ちゃんが買うの、楽しみに待ってるからね」

「えへへ……待っててね」

夏希の手をとり、優しく握った。

桜は幸せそうに微笑み、目を閉じた。

「待つ？　いいえ、待たせないの」

ドンッと、テーブルに、お昼ご飯の乗ったぼんを置いた。

今日のお昼ご飯は、サンドイッチだった。

「今日、買いに行くの」

唖然としている夏希と桜を見下ろし、目を光らせて言った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「も……もしもし……はい……ごめんなさい……」

夏希は今、自分の部屋にいた。
今は昼の１時３０分過ぎ。
桜と紅葉は、携帯を買いに行く予定が急遽出来たので、お昼ご飯が終わってからすぐに、携帯ショップへと出掛けた。
夏希も一緒に行こうと言われたが、さすがに遠慮した。

行く場所も無くなったので、家に戻ってきた。

そして……何故かベッドの上で正座をしながら、電話をしていた。
鬼のように電話やメールをしてきた犯人に、先程ようやく連絡を返した夏希。

犯人は、美魅だった。

『私が電話したのに、出ないってどういうことかしら！？』

「ごめんなさい……気づきませんでした……」

『ごめんなさいぃ！？　それだけで済むと思っているのかしら！？』

「お……思いたいです」

『バカッ！　私がどれだけ心配したと思ってんのよ……夏希のバカ……』

「っっ……！？」

突然美魅の言葉が震えた。
まるで、泣きかけているような声だった。
夏希は、そんな美魅の様子に少し困惑していた。

『責任……』

「へっ？」

『私をこんなに心配させた責任……とってよ』

「責任って……どんな？」

『……デート』

「えっ……」

『今すぐ私とデートしなさい！』

電話の向こうの美魅は、どんな顔をしているのか分からない夏希だが、何故か美魅の不安そうな顔が思い浮かんだ。

「……いいですよ」

『えっ！？　い、いいの……？　嫌じゃない……？』

夏希の心の中で思ったとおり、美魅が弱くなってしまった。

「美魅ちゃんが、喜んでくれるなら、ボクは嬉しいですよ」

『っっ……な、何よそれ！　夏希のクセに生意気！』

「えへへ」

夏希は、美魅が恥ずかしがっている声を聞いて、何故かニヤニヤしてしまった。

『っっ……悔しい……。夏希が私よりも優位になるなんて……屈辱』

ブツブツと言った後、美魅は急に笑い出した。

『クスッ……アハハッ……そうよ、そうだわ……私が夏希の弱味を握ったらいいのよ……なぁんだ……簡単じゃない』

「み、美魅ちゃん……？」

久しぶりに、夏希は美魅に恐怖を覚える。首筋に鳥肌が立つ。

そして、美魅は勝ち誇ったような声で言った。

『今から夏希の家に行く』

「えっ！？　ボクの家に……？」

『行くったら行くの！　夏希の家でデートするの！』

「わ、分かりました……。別にいいですけど……」

『決まりね。じゃあ、今すぐ駅まで迎えに来なさい』

「えっ！？　今すぐ……？」

『家に居ても暇だから、今駅前を1人でブラブラしているのよ』

「……」

美魅を家に呼んで、一緒に遊ぼう、一緒にいてあげようと、夏希は決心した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「思ったより、狭いのね」

「この狭さが、ちょうどいいんですよ」

美魅は、布団の上に座り、部屋をキョロキョロ見ている。

夏希は台所にいて、冷蔵庫から冷たい麦茶を取り出していた。

「ねー……夏希」

「何ですか？」

美魅は夏希の枕を抱き締めながら、麦茶の入ったペットボトルを机に置いた夏希を見つめている。

夏希はコップやお菓子を並べながら、様子がおかしい美魅を見てキョトンとしていた。

「夏希の部屋に……さ」

「はい？」

「エロ本って無いの？」

「……っぶっ！　あ、あるわけないですよ！　何を言ってるんですか！？」

夏希は美魅の前に立ち、顔を真っ赤にさせて、否定した。

「えーっ……つまんなーい」

美魅は、ブーブーっと口を尖らせて布団に寝転んだ。

「夏希の“おかず”が何なのか知りたかったのになぁ」

「おかず？」

また夏希はキョトンした。

「ん？　あ、そうか……夏希はチェリーボーイ、お子さまだもんねー……」

「何を言ってるんですか？　何かバカにされた気がするんですが……」

「クスッ……バカになんかしてないよ。ただ、これ以上変な虫がつかないように、マーキングしておかないと……」

「へっ……？　美魅ちゃ……」

美魅は、夏希の腕を引っ張り、布団へと誘った。

「ふぐっ……」

夏希は一瞬、何が起こったのか理解できなかったが、すぐに理解した。

また夏希は、告白された時のように、美魅に押し倒されていたのだ。

「いい眺め……」

「み、美魅ちゃん……？」

夏希のお腹の下あたりに、馬乗りになっている美魅。少し息があらい。

「まったくバカね、夏希は……。家で私と遊ぶってことは、“大人の遊び”ってことよ？」

艶かしく笑う美魅。
その笑顔を見て固まる夏希。
「今日は逃がさない……。変な女より、私のほうがいいに決まってる。男は男にしか分からない」
美魅は、ググッと夏希の顔へと近づく。口づけをする気だ。
「ま、待って美魅ちゃん！　意味が分かんないです！」
夏希は、わたわたと手を振り、混乱している。
「意味？　意味なんて簡単に決まってるじゃない……私は貴方を愛している……ただそれだけよ……」
「っ……」
美魅の目をまともに見てしまった夏希。その目からは、美魅の想いが一つ残らず流れ込んできた。
“愛している”
このようなことになってしまった理由はそれだけで十分である。
「黙秘は、肯定とみなすからね？　……クスッ、怯えちゃって……可愛い」
ニッコリと、嬉しそうに笑う美魅。そして……そのまま夏希の唇を奪った。
セミの鳴き声も聞こえず、扇風機の音が心地よく響く蒸し暑い部屋

で……夏希と美魅の、お互いの唾液が舌を使って混ざりあう音が響いていた。
しかしその行為は、美魅からの一方通行である。
嬉しさも一方通行。
楽しさも一方通行。
気持ちよさも一方通行。
愛も……一方通行。

「んっ……そういえば」

美魅は、ゆっくり夏希を味わい、唇を離した。
そして、顔を近づけたまま言った。

「この前言ってたよね？　いきなりキスしたら、今度は本気で怒るんだったよね？　ね、怒らないの？」

クスクスと笑い、虚ろな目をした夏希をからかう。
しかし夏希は、頭の中がグチャグチャで、息が切れたような声しか出ない。

「夏希って、本当に可愛いー……」

美魅は優しく夏希の頬を撫でる。フニフニしていて、柔らかい。

「食べちゃいたい……ううん、食べちゃおうっと」

ペロッと、自分の唇を舐める美魅。目が本気である。
……男の目だ。

「っ――！？」

声にならない声で叫び、美魅を拒否するが……無駄だ。止まらない。

「夏希、愛してる……」

「っ……――」

美魅が、夏希のTシャツを脱がそうとしたときだった――。

ピリリリ――っと、携帯の着信音が、鳴った。

「ちっ……いいところだったのに……誰よ」

着信音は、美魅の携帯電話からだった。

イライラしながら、美魅は携帯電話をポケットから取り出した。

「――えっ……」

美魅は、携帯電話のディスプレイを見て、固まった。

着信音の正体は、電話。

電話の相手は……“ミサト”。

「なん……で」

美魅は震える手で、通話のボタンを押した。

「もし……もし？　ミサト……？」

美魅の声も身体も震えていた。

ミサトからの電話が、まるでこの世の地獄かのような。

「……ご、ごめんなさい……そんなつもりじゃないから。……ちがっ！　違うって……！　そんなわけないでしょ！　“約束”なら覚えてるから……ちゃんと覚えてる」

夏希は、いつもと様子が一気に変わった美魅を、心配そうに見つめている。

「うん……分かった。今すぐ帰るから……そんなに怒らないで……。……だから違うって！　私は今……“1人”だから……」

美魅は、静かに夏希から離れて、布団からも離れた。

「……私は、ミサトだけの“モノ”だから……」

そう言って、美魅は電話を切った。

「美魅ちゃん？」

夏希は先ほどまでの気持ちはどこへやら、心配そうな顔で美魅に近寄る。

「……急用ができちゃった。もう帰るね……バイバイ」

「えっ……」

「フフッ、何で不満そうな顔してんのよ？　そんなに私とエッチしたかったの？」

「なっ！？　ち、違います！」

「フフッ……そうよね、夏希は違うもんね……」

美魅は、一瞬暗い顔をして、また笑顔に戻った。それは、どこか悲しい表情を思わせる笑顔だった。

「ありがとう夏希。だーいすき！」

「あっ……！」

美魅は逃げるように、夏希の部屋から出ていった。

夏希は出ていく美魅を追いかけようとしたが、体が動かず、ただボーッと見ているだけしかできなかった。

「美魅ちゃん……」

何故か、胸の奥がズキッと痛んだ夏希。それは、竜也を想うときと同じ痛みだった。

しかし、今の夏希には、この痛みの正体が何なのか分からなかった。

理解出来なかった。

モヤモヤした気持ちだけが、胸の中を蹂躙する。

１５、遠回りな告白

「えっ？　美魅ちゃん、学校に来てないんですか……？」

「うむ、そうなんだ。何でも、風邪をひいたそうだ」

朝、場所は学校。一時間目が終わってからの１０分休憩。夏希と蛍が教室で話していた。

いつも夏希の隣の席に座っている美魅。しかし朝から、隣の席にいるはずの美魅がいないのだ。

そして先ほど、学級委員長である蛍が、担任の教師に美魅の事を聞いてきたのである。

「美魅ちゃんが……風邪」

「うむ、どうりでメールも電話も返事がないわけだ」

夏希と蛍が、一時間目が始まる前に、メールや電話をしたが、返事がいっこうに無かった。

しかし、風邪ならば、返事が無い理由が納得する。

「昨日……あんなに元気だったのに……」

ボソッと、夏希は呟く。

しかし、その言葉は蛍の耳にしっかりと届いていた。

「む、昨日美魅と会ったのか？」

「えっ……あ……いや」

「何故隠す？　別に隠すような事ではないだろう？」

隠すような事である。

まさか、美魅に襲われていたなど、言えるはずもない。

「……昨日何かあったな？」

「うっ……」

蛍は勘がいい。

蛍にはシックスセンスが、異様に発達しているのかもしれない。

「そう言えば昨日、夏希の部屋が少しうるさかったようだが……美魅が部屋に来たのか？」

「っっ……！？」

“沈黙は肯定”。美魅から言われた言葉を、夏希は思い出す。

「……お前の想い人は、竜也先輩だろうが……バカ者」

はぁ……と、ため息をつく蛍。

それを、キョトンと見ている夏希。

「……あっ」

すると、夏希の携帯電話が、ブルブルと震えた。メールである。

「美魅からか？」

「んっ……ううん。違いました」

「……“桜ちゃん”？」

蛍は、チラッと覗きこむと、そこには見知らぬ名前が表示されており、首を傾げた。

「知りませんか？　大家さんの娘さんですよ？」

「あ、あぁ！　あの子か……そう言えば、いたな。接点が無くて、話したことがないな。夏希は仲がよいのか？」

「はい！　妹みたいで、可愛い子ですよ！」

「うむ……それはいいのだが……」

蛍は、メールの内容を見て、少し苦笑いになっていた。

『夏兄ぃ～！（´∀｀）
えへへっ！
何でもないよー（＊´∀｀＊）
呼んでみただけ！
また一緒にお風呂に入りたいです！
ねぇねぇ
今日の夜も電話していい？
返事待ってるからね！』

まるで、恋人に送るかのような内容に、さすがの蛍も引いてしまっていた。

「夏希……その……頑張るのだぞ？」

「えっ？　あ、はい？　頑張ります」

夏希が桜にメールの返事をしたと同時に、チャイムが鳴った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「カハハッ、あのツンデレ男の娘が風邪って！　カハハッ！　そらおもろいやんけ」

昼休み。中庭の芝生グラウンドに、夏希と竜也が、昼ごはんを食べていた。

夏希と竜也は、２人分座れるベンチに寄り添うように座っていた。

学校の竜也は、美魅のように、性別を偽ることもせずに、ありのままの姿でいた。

金髪に制服。おまけに綺麗な姿。

しかし、竜也にはあまり、親しい友人がいない。それは何故か、簡単なことで複雑だった。

“近寄りがたい人間”だからだった。
金髪に、水色の瞳。
少し目付きが悪い目。
男のような性格、口調。
端から見れば、不良と思われている。
だから、竜也の外見ばかり見ている者は近寄らず、竜也の中身を見ている者は親しくなれた。
「おもしろいって……ボクは心配なんですよ……。いつも元気な美魅ちゃんが、急に休みだなんて……」
夏希は、自分で作ったお弁当を食べていたが、箸が進んでいない。
ため息ばかりだ。
「そないに心配やったら、美魅ん家に見舞いに行ったらどうや？
顔も見れて一石二鳥やで」
「あ、そうか……その手がありましたね！」
パアッと、夏希の表情が急に明るくなった。
しかし、1つ問題が……。
「でもボク……美魅ちゃんの家、知らないです……」
「アホ、そんなん教員に聞いたら一発やろが。可愛い声で“友達が心配なので、教えてください”っったら、個人情報なんたらっつー法律なんか、破ってくれるわ」

ケタケタと笑いながら、菓子パンにかぶりつく竜也。本当に外見と中身のギャップが激しい。

しかし、その荒々しくも優しい性格が、夏希を元気づけてくれるのだ。

「……ありがとうございます、竜也さん」

夏希は、嬉しさのあまり、無意識に竜也の肩にもたれかかった。夏希は、ほんのり頬が赤かった。

「夏希ちゃん……？」

「竜也さん……あの、相談があるんですけど……」

ドキドキと、また胸が心地よい痛みに襲われていた。

「なんやー？　竜也先輩に何でも相談してええで」

竜也は、夏希の頭を撫でて、ニヤニヤと笑っていた。可愛い後輩からの相談は、先輩として嬉しいものである。

「あの……胸が痛いんです……」

「へ？」

「変なんです……竜也さんのことを想うだけで、胸がギュッと締め付けられるような……痛いんですけど……心地いいっていうか……。これって、何なんでしょうか……」

ジッと、少し虚ろな……泣きそうな目で竜也を見つめる。

「……ぶっ！？　な、夏希ちゃん……！？」

突然の言葉に、竜也は焦る。

まさかこんな、ぶっこんだ相談だとは思わなかった。

「それは……天然か？　それとも人工か……？」

「……どういう意味でしょうか？」

キョトンとした顔で竜也の目をジッと見つめる。その言葉に偽りはなかった。

「っ……天然かい……！」

ハーッと、盛大なため息をつく竜也。鈍感でもなんでもない、どちらかといえば敏感な竜也は、可愛い後輩からの遠回りの告白に緊張してしまう。

「……それは……あれや」

ちなみに、竜也は告白をされたことは……“一度も無い”。

告白はしたことあるが、全てが撃沈しているのは、秘密であった。

つまり、一度も男性とお付き合いしたことがないのだ。

だから、竜也の心の中は台風並みに荒れていた。混乱と言ってもいい。

人生初の大規模の台風が上陸して、慌てふためっている人である。

「何ですか……？」

ドキドキしながら待っている夏希。竜也が心の中では慌てているなど、知るよしもない。

「っ……」

“それは、好きだということだよ”と、正解を言ってしまうのは、竜也の中では不正解だった。

何故なら、人生初の異性からの告白に、内心舞い上がっている自分が嫌いだからだった。

しかも、可愛い男の子から。

隣で一緒に歩くのに、申し分ない男の子。むしろ自慢したいくらいだ。

彼氏にすれば、純粋な夏希に、あんなことやこんなことができる。

自分好みにすることができる。

竜也は、こんな不純なことを思ってしまった自分が……嫌になってしまっていた。

純粋な夏希に、申し訳なく感じてしまっていた……。

「うん、あれや……。“竜也先輩を尊敬している”ってことや！」

「“尊敬”……？」

「せや、自分も竜也先輩みたいに、かっこよくなりたいなっつー尊敬の気持ちや！　カハハッ！　竜也先輩照れちゃうわー！」

今ならまだ……“勘違い”で、終わらせることができる。
夏希には、自分よりももっとふさわしい彼女ができるはずだと、竜也は高ぶる気持ちを静めた。
「そう……なんですか。なるほど」
夏希は、何故かモヤモヤした気持ちを感じながらも、納得してしまった。
「せやから、そないに難しく考えでもええで。気楽にいこうや」
「……はい！」
「カハハッ！　……はぁ……損な性分やで……」
竜也は夏希に聞こえないように、ため息をついた。
竜也は解決したような気分だったが、まだ解決していなかった。
まだ夏希の心には、竜也に対しての恋心が生きているのだ。
今はまだ、夏希は気づいていないが……自分で気づく時は、そう遠くはない。
その時竜也は、逃げずに夏希の気持ちを真っ正面から答えれるのだろうか……。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ごめんなさい……分からないのよ」

「えっ？」

「春木さんの御家族から、そういう情報は、安易に流さないでくれって言われてて……担任である私でも、春木さんの住所知らないのよ」

夏希は、職員室にいた。
そして、お見舞いに行く為に、美魅の住所を聞きに、竜也と一緒に職員室へとやって来た。

しかし、問題が起きてしまった。

担任の先生でさえ、美魅の住所を知らないのだ。
形として知っているのは、校長や教頭などの上の人間。
美魅の家族から、個人情報等はごく一部の人間だけしか知らさないように、命令していたのだ。

「たかが生徒の保護者が、そんな事できんのか……？」

「そうなのよ……私も疑問に思ってたのよ……。でも、校長がそういうことにしとけって……」

担任の先生が、ショボンとしてしまった。

「そうなんですか……」

夏希もショボンとしてしまい、２人からは、負のオーラしか感じな

い。

「しゃあないなぁ……つまり、ウチが校長に殴り込みに行ったらええんやろ？」

「違います！　何がつまりなのかが、分かりません！」

「えーっ……だって、回りくどくて、めんどいわ。校長に直接聞いたほうが単純明快や」

「そこまでしなくて大丈夫ですよ！　美魅ちゃんならきっと、電話をくれますから……」

「なんやそれ。いつくるか分からん電話を、モヤモヤしながら待っとるんか？　夏希ちゃんが心配なのは、今やろ」

「そうですけど……」

「せやから、美魅の住所を校長から聞き出して、行ったったらええんや」

「ら、乱暴すぎます……！　……竜也さんの気持ちは嬉しいです。でも、それはきっと美魅ちゃんが嫌がります……。だから、美魅ちゃんから来るのを、待っています。心配ですけど、耐えるのも大事なんです」

「……へいへい。夏希ちゃんがええなら、ウチは何も言わん」

竜也は優しく微笑み、夏希の頭を優しく撫でた。それに夏希は泣きそうになってしまったが、グッとこらえた。

「まったく……夏希と美魅は、ホンマに仲ええんやなぁ」
うらやましくなるような仲のよさに、竜也は軽く嫉妬していた。
いつか自分も、夏希や美魅や蛍と、こんなふうに仲良くなれるものかと、考えていた。

「……“私の”美魅に、何かご用かしら？」

突然、夏希と竜也の後ろから、綺麗な声をした女性の声が聞こえた。

「っ……！？」

2人は、ほぼ同時に振り返った。2人の後ろに立っていた人物……。

「あら、驚かしてしまったかしら？　ごめんなさいね、美魅の話題が出てたようだから、気になってしまったの」

女性は、真っ黒の長い髪。
身長は高い。竜也とほぼ同じ。
スタイルはとっても良い。
着ているスーツがとても似合っている。
綺麗な顔立ちをしていて。どこかのモデルみたいだった。

「あ、いえ……大丈夫です。あの……もしかして、美魅ちゃんのご家族ですか？」

「クスッ、そうよ。私は美魅の“姉”よ」

「お姉さんですか……。あ、ボクの名前は、雨宮　夏希といいます！」

「……ウチは、白木　竜也ッス」

「私は、春木　ミサト……。よろしくね」

16、支配欲

「ふ、ふわぁぁぁ！？」

突然、担任の先生が目を丸くしながら、ミサトを見て叫んだ。
あわあわと、慌てふためいている。

「り、り、り……理事長！」

「おはようございます、涙子（るいこ）先生」

ミサトは、夏希達の担任の先生……涙子先生に、ニッコリと微笑んだ。

「えっ？　理事長……？」

夏希はミサトを見て、ポカーンとしていた。驚き過ぎて、リアクションが、できなかったようだ。

「あら、美魅ったら私の事を話していないのね……クスッ」

ミサトは夏希をじろじろと見て、微笑んだ。

「可愛らしい貴方は、美魅の……お友達かしら？」

「はい！　美魅ちゃんは、ボクがこの学校に転校してきて、初めて

の友達になってくれました」

「そう……美魅に、こんな可愛らしいお友達がいたなんて。あの子ったら……」

「……？」

ミサトは、微笑んでいたと思えば、急に少し悲しそうな顔をした。

「あ、あ、あの……」

すると、まだ若干慌てている涙子先生が、ミサトを呼んだ。

「理事長が……私に何かご用意でしょうか……？」

「あら、ごめんなさい。忘れてしまっていたわ」

ミサトは、用事を思い出すと、持っているカバンの中から、茶色の封筒を取り出した。

「これを渡しにきたの。美魅のテスト結果の、保護者確認書。たしか、今日締め切りですよね？」

「あ、わざわざすみません……。風邪なら、締め切りを過ぎてからでも、よかったのですが……」

「いえいえ、美魅が風邪なら、保護者である私が、持っていくのは当たり前よ。それに、締め切りは守らないと。貴女に申し訳ないわ。大切な弟の、担任なんですから」

「あ、あはは……」

涙子先生は、苦笑いのような笑顔で、笑った。涙子はミサトが、苦手のようだ。

しかし、その事をミサトは知っている。知っていながらも、ミサトは涙子先生に変わらぬ態度で接している。

すると、涙子先生が……。

「理事長って……春木さん……、美魅さんの保護者だったんですね……知りませんでした」

「クスクス、隠すつもりは無かったのよ。ただ、あまり知られてほしくなかっただけ。理事長の弟だからって理由で、特別扱いされたくなかったから」

「そ、そんなことしませんよ！」

「分かってますよ。今年、貴女を水の都高校の教師として採用したのは、私なんですから。私の見る目に、狂いはありませんよ」

「っ……っっ」

涙子先生はボッと顔が真っ赤になった。

「クスクス、涙子先生、それでは失礼しますね。“夏希さん”も、さようなら」

ミサトは一礼して、振り返らずに職員室から出ていった。

「……ケッ、ウチには挨拶無しかい」
竜也は、ミサトが出ていった方向を睨み付けながら言った。
そして、竜也は息をフーッと吐いて夏希を見た。
「竜也さん？」
「なるほどな、よー分かったわ。そら、住所や色々な事隠すわけや」
「どういう事ですか？」
「水の都高校の理事長やぞ？　そんな理事長の関係者が、生徒ん中おる言うたら、どんな目で見られると思う？」
「それは……」
どんな目であろうとも、それはきっと普通の目では無い。普通の人間を見るような目ではないだろう。そして、根も葉もない噂が流れるであろう。
理事長の弟だから、どんな成績でも卒業できる。
理事長の弟だから……。
理事長の弟だから……。
“理事長の弟だから”と言う言葉が無限に溢れかえる。
だから、隠す必要があった。
教師にまでにも全てを……。

「春木さん……いつも1人だったのは、そのせいだったのね」

涙子先生が、悲しそうに微笑んでいる。

涙子先生が水の都高校に採用され、4月に、2年3組の担任を任された時、美魅がクラスで浮いているのが最初に気づいたことだった。何回も話を聞こうとしたが、全て簡単にあしらわれてしまっていた。

それは、美魅が自ら人を避けていたのだ。仲良くなれば、いつか自分が理事長の弟だとバレてしまうから……バレてしまった後の、人間の変わってしまう姿が……怖かったから。

「あれ？　でも……美魅ちゃんが、理事長の弟だって事を知っている人がいましたよ？」

夏希はふと、転校してきたばかりの時を思い出した。

「たしか……転校してきた初日に、美魅ちゃんにパシられたことがあったんです。そのパシられている時に、別のクラスの男子に、噂を聞いたんです……」

“美魅に逆らったり、機嫌を損ねるようなことをしたら、学校から消される。“家庭の事情のため転校”って事になって。美魅を溺愛している“美魅の姉”が、この学校を牛耳ってる奴だから。美魅が気に入らない事があったら、姉は必ず動く。”

「って……あれは、どういう事なんでしょうか……」

夏希の疑問に竜也は、突然しかめっ面になっていた。

「竜也さん？」

竜也の様子がおかしくなっていることに、夏希は見落とさなかった。

「いや、何でもない。多分それは、ごく一部の生徒が美魅を知っていて。面白半分で噂を流したんや。愉快犯ってやつや。気にせんとき」

「は……はい」

竜也はしかめっ面から、微笑みに変わった。しかし、目が笑っていなかった。何かを……隠しているような目だった。

そんな様々な疑問をもみ消すように、昼休憩の終わりの予鈴が鳴り響いた……。

☆☆☆

ぬいぐるみが沢山ある、女の子のような部屋。
ベッドの上で、美魅は眠っていた。

「あ〝ー……最悪」

そして、不機嫌だった。

「何で今日にかぎって風邪ひくのよ……ありえない……」

今日は、美魅にとって特別な日だった。何故、特別な日かというと……。

「今日は、夏希に告白して、ちょうど1ヶ月目なのに……」

美魅が、学校の教室で夏希に告白してから、1ヶ月経ったのである。
美魅は、今日もう一回真剣に告白をしようとしていたのだ。

しかし……風邪をひいてしまった。

「う〝ー……最悪……！」

美魅は布団の中で悶えていた。
すると……。

「美魅、入るわよ」

「えっ！？」

ガチャッと、突然美魅の部屋が開いた。

「美魅、いい子に寝てた？」

ミサトが、微笑みながら入ってきた。手には、スーパーの袋。中身は様々な果物が入っていた。

「ミサト！？　し、仕事はどうしたの！？」

「何を言ってるのよ。大切な美魅を1人にして、仕事なんか出来るわけないでしょ」

「だからって……休んだの！？」

「当たり前じゃないの」

「っ……」

美魅は、更にぐったりとしてしまった。呆れているのだ。

「それより、リンゴとか色々果物買ってきたのよ！　美魅、果物好きでしょ？」

ニコニコと笑いながら、美魅の側に近寄る。そして、美魅の足元の近くに座った。

「今は……いらない」

「あらあら、食欲が無いのは仕方ないわね……残念」

ミサトは、机の上に果物の入ったスーパーの袋を置いた。

「あ、そうそう。今日、書類を学校に届けに行ったら……美魅の“お友達”に会ったわ」

「えっ！？」

美魅は、ミサトの口から出るはずのない言葉が聞こえ、無意識のうちに、ミサトを見ていた。

そして……嫌な汗が頬を伝った。

「たしか……“夏希”って言ってたわね……あの子」

ニコニコと笑いながら、ミサトは美魅の目を見つめる。美魅の視線を反らさせないように、ジッと見つめる。

「し……“知らない”……そんな人」

「あら？　でも、たしかに友達って言ってたわよ？　転校してきて、初めての友達だ。って……」

「その子の妄想じゃないの。もしかして、私のファンじゃないの？」

嫌な汗をかきながら、美魅はひきつきながらも、嫌味な笑みを浮かべていた。

「ふーん……じゃあ“危ない”わね」

「えっ……？」

ミサトから笑顔が消えた。

「美魅を友達だと妄言する危ない輩は、ストーカーになる可能性があるわ。早急に“処分”しないと……」

「ちょ……ちょっと待ってよ。処分とか……やり過ぎじゃない？放っておいても大丈夫だっ――――」

「大丈夫なわけないでしょ！」

ビリビリと、ミサトの大声が部屋に響いた。響いただけでなく、大声で美魅が完全に黙ってしまった。

「あんなストーカー野郎に、私の大切な美魅を汚される可能性があるのよ！？　そんな奴が、美魅のクラスに……私の学校に居ること事態がありえないわ！　あんな奴、早急に退学よ！　そうね、今日中に退学させないと……一分一秒とて、あの学校に居させるわけにはいかないわ！」

ミサトは携帯を取り出し、何処かへ電話をかけようとした。しかし……――――

「やめてぇぇぇぇ！！」

美魅が、勢いよくミサトの腰にすがり付き、携帯を床に叩き落とした。

「何をするのよ！？」

「止めて！　違うの！　夏希は……夏希は私の大切な友達なの！」

「はぁ！？　さっき、違うって言ってたでしょ！！」

「あれは嘘なの！　ごめんなさい……夏希を退学にしないで……“消さないで”！」

泣きながらミサトに懇願する美魅。その姿は……今までの美魅からでは考えられない、異常な姿に見えてしまう。

「もう……これ以上……私の大切な人を消さないで……」

「クスッ……馬鹿ね」

そっと、ミサトは優しく美魅の頭を撫でる。その手には、愛が込められていた。

「消すわけないでしょ。だってあの子、“男の子”じゃない」

「っ……」

「男の子の友達なら、大歓迎。私が消すのは……美魅に近寄る“糞ビッチ共”よ。美魅には、私がいる。お姉ちゃんだけが愛してるの。お姉ちゃんだけが愛していいの。他の女共に、美魅を愛する権利なんかあるわけないじゃない」

ミサトは、美魅を優しく起こして……再び仰向けに寝かした。そして……美魅に覆い被さった。ミサトは、美魅を押し倒したような形になった。

「美魅は、私だけのモノ。私も、美魅だけのモノ。愛しているわ……美魅」

「っ……やめっ……――」

ミサトは、美魅の唇を奪った。
ねっとりと、ゆっくりと、美魅の口を蹂躙するミサト。
苦しさと、恍惚さで美魅は布団を握り締めて、ミサトからの攻めに耐え続けていた。

これで何度目か分からない無理矢理のキス。最初は、何故こんなことをするのか理解できなかった美魅。
しかし、夏希が現れてから理解した。
愛するものを支配する“支配欲”だった。お前は自分のモノだと相手に植え付ける行為。

「美魅……美魅……」

ミサトは、完全に興奮していた。もう止まらない。さかりのついた犬のように……止まらない。
目も血走っていた。

「美魅っ！」

ミサトは、美魅の寝巻きを乱暴に脱がし、下着も脱がし、裸にする。
美魅の綺麗な素肌が、全て露になる。

「ミ……サト……」

美魅は、もう抵抗しなかった。
何もかもを諦めた目で、姉とは思えない姉を涙目で見つめる。
それは、最後の抵抗と言っても、間違いではなかった。

しかし、それは無意味だった。
今のミサトには……何を言っても無駄だった。
美魅は、耐えるしかなかった。
歪んだ愛を、受け入れるしかなかった。

★★★★★★★★★★★★★

歪んだ愛に、愛は存在しない。
歪んだ愛は、支配欲に変わる。

変わるには、何かしらの理由が必要である。理由が無ければ、変わらない。

愛に理由なんかは必要である。
理由も無しに人を愛せない。

たとえ、それが家族であろうとも……姉弟であろうとも。

これから語るのは、美魅とミサトの物語。
夏希と出会う数年前に、物語はさかのぼる。

ミサトと美魅が、歪んだ物語。

美魅ストーリー～1～

ミサトと私は、本当の姉弟じゃない。

私が小学校に入学した時に、私の母親が病気で亡くなった。
父親は、私の前では明るく振る舞っていたが……内心では死にたいくらいショックだったと思う。

まだ愛だの何だの知らなかった私は、子ども心に、父親のそんな姿に我慢できなかったのか……女装をするようになった。

最初は、母親のぶかぶかのスカートを履いたり、化粧をしてみたりと……母親の真似をした。

少しでも、母親みたいになれたらと……そうすれば父親は少しでも元気になってくれるかもしれないから。

しかし……それは叶わなかった。

父親や親戚は、私のそんな姿を見て、母親が亡くなったショックで、母親の影を追うようにしている行為だと言っていた。

父親は少しも元気にならないし、女装をし続ける私に『止めろ』とさえ言ってきた。

だけど、私は止めなかった。

買う洋服も、女の子の服。
髪も伸ばし、遊ぶのも女の子と。
そして気づけば、女の子のように振る舞っているのが、当たり前のようになっていた。
もはや、本来の目的なんて消えていた。忘れていた。そもそも、目的なんて無かったのかもしれない。
父親も諦め、私を“娘”のように育てはじめた。
世間も、最初は女装する私を蔑みの目で見ていたのに、しだいに順応していったのか、私に……
『可愛いね～、美魅ちゃん』
『お母さんにそっくりだよ』
『女の子よりも可愛いじゃないか。似合ってるよー』
などの、軽薄な言葉で私を誉めた。
言葉に重みが無い。
心に届かない。
誉められてるのに、貶されているようにしか聞こえなかった。
私に向ける笑顔が、無表情に見えた。
そんな上辺だけの愛に私は感じないし、ときめかない。
周りからしたら、私は無愛想で冷たい人間だと思われたに違いない。
だけど、そんなの知ったことではない。

周りの人間が悪い。
他人に擦り付けた？
人聞きの悪いこと言わないで。

父親さえ、私はそんな目で見るようになってきた、中学校一年生の頃だった。

父親が、いつまでも独り身では寂しすぎたのか、再婚することになった。

相手は、有名な私立高校……水の都高校の理事長。
大学生四回生の娘が１人。しかも、次期理事長になるであろうと言われている娘。

どうやって知り合ったのかなんて知らない。興味も無かった。
だから聞かなかった。

母親になる人にも興味無かったし、姉になる人にも興味が無かった。
家族なんて、しょせんただの他人の集まり。クラスメイトと一緒。
“仲良くしましょう”なんて、今どき流行らない。

だから私は……無情になった。
誰も寄せ付けない。
冷血で、無情な人間。

社会が冷たいんじゃない。
私が社会に冷たくしているだけ。
私は私で生きていく。
そう思っていた。

そう信じていた……。
ミサトに出会うまでは。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「はじめまして。私の名前は、ミサトって言うの。貴方の名前は？」
「……私の父から聞いているはずですが」
「あぁ～ん……冷たいなぁ美魅ちゃんは～」

再婚し、父親と私の家に住むことになった、新しい母親と姉となったミサト。
そして、私の部屋。
姉となったミサトが何故か、私の部屋に上がり込んできた。
カーペットの上に正座し、ニコニコと笑っている。

「お母さんとお父さんが仲良くしてるんだから、私達も仲良くしよ～よ！」

「そんな……子供みたいなこと言わないでください。ミサトさんは、大人なんですから」

「ぶー……敬語はやめなさい！　あと、ミサト“さん”って呼ばないで！　家族なんだから、呼び捨てでいいの！」

「……はぁ」

きっと、私がミサトの言うことを聞かなければ、部屋から出ていってくれない。
それなら……聞くしかない。
「分かったわよ……ミサト。ほら、気がすんだなら、早く部屋から出ていってよ……」
「うわぁ……仲良くなるための、呼び捨てとタメ口なのに、突き放された感ＭＡＸ」
だけど、相変わらずミサトはニコニコの笑顔。……この人が、よくわからない。
「美魅ちゃん、そんなに可愛いんだから、もうちょっと笑ったら、もっともっと可愛くなるのに～」
「……可愛い？」
ミサトの言葉に、私はピクッと反応してしまった。“可愛い”……私が、一番聞きたくない言葉。
「うん、可愛いじゃん美魅ちゃん。男の子だなんて、信じらんないな～」
「そんなこと……本当に思ってないくせに……」
「えっ？」
「いるんだよねー……私の外見だけ見て、友達になっておいたら自

慢やらネタに出来るからって、適当に言葉選んで私に近寄ってくる奴」

「美魅ちゃん……」

「貴女も、そんなタイプ？　仲良くなった新しい弟が、女装してるって、ネタに出来るから？　私をネタにして、一時の有名人になりたいって思ってるの？」

私のこの時の顔は、本当に嫌な顔をしていたんだと思う。
だけど、ミサトは逆上することも、引くこともなかった。
柔なか表情で、私を見ていた。

「そんなふうに思ってないよ！　まぁ、確かに可愛い弟が出来たって、自慢はするけど……えへへ」

「……あっそ」

「あー！　また冷たくした！　なによ“美魅”ったら、少しくらい笑ったらどうなのよ！」

「笑う？　何で可笑しくないのに笑わなきゃいけないのよ」

「ほぅ……可笑しかったら笑うのね？」

「えっ？　何？　ちょっ……ミサト？　何でそんなに笑ってるの？
止めて……そんなにジリジリ近寄ってこないで！　なにその手！？　ワキワキしてる手は何！？　やめっ……やっ……いぎゃあぁぁー！！」

「ほほほっ！　ここか？　ここがええんかぁ～？　お姉さんがマッサージしてあげるわー！　ぬぅあっはっはっ！」

「やめっ……っは……脇腹はっ……ダメぇっ！」

私はミサトにベッドへと押し倒され、そのまま……脇腹へのマッサージと言う名の、こちょこちょ攻撃に襲われた。

「ふっふっん！　美魅敗れたりぃ！」

「意味……分かんない……！」

くすぐられたおかげで、息がとても荒くなり、しゃべり方に支障がでてしまっていた。
うまく喋れない……。

「うんうん。さっきよりいい顔してるよー。何て言うか、こう……色っぽくなったよ！」

「嬉しくない！」

「てへぺろ！」

「ウザ！　可愛くないし、イラってするだけだから！」

「もー……美魅ったら、ツ・ン・デ・レ……なんだから！」

「……今すぐ部屋から出ていって下さい……」

ミサトの絡みが……今まで出会ったことの無い、絡みだった。
混乱したし、イラっとした。だけど……不思議と嫌じゃなかった。
むしろ……心地よかった。
最初の嫌な気持ちなんて、どっかに吹っ飛んでしまったような……。
そんな清々しい気持ちだった。
心のどこかでは、最初からミサトを認めていたのかもしれない。
ミサトは、今まで会った人とは全く違うということを。
ただ認めたくなっただけな気がする。ミサトの言う、ツンデレだったのかもしれない。

産まれて初めて……人を認めた。
ミサトは、私の初めての……認めた人。信頼していいと、思えた人だった。そして、興味を持てた人でもあった。

ミサトは、明るくて前向きで、いつも私を元気づけてくれる。
笑うことが少なかった私。だけど、ミサトには、笑顔で話すことができた。
いつも曇りだった心に、光が射し込んできたような……そんな気分だった。

「笑顔っていいよー！　太陽みたいでさー。暖かいよね～」
「ふーん……。私は別にそう思わないけどね」
「えー！？　美魅の笑顔は一番輝いてる太陽なのになぁ」
「っ……な、何恥ずかしいこと言ってんのよ……」

私の笑顔が太陽なら……ミサトの笑顔はどうなるのよ。太陽以上に、輝いてるじゃない。

「恥ずかしがってる顔も、輝いてるよ～……にゃふふ」

「あぁーもぉー……ミサトって何で意地悪なことしか言わないの！？」

「んー？　だって美魅が可愛くて、ついイジメたくなるんだもーん。にゃははっ」

「……うぅ」

ミサトに、“可愛い”って言ってもらえるのが、嬉しかった。
ミサトが私を褒めてくれるのが、とても心地よかった。

ミサトの言葉に“重み”は無い。だけど“想い”があった。
言葉を聞いてくれる人を想った言葉で、話してくれる。
だから、話していて楽しいし、ミサトの魅力にも惹き付けられてしまう。

ひねくれた私をも、ミサトは惹き付けてしまった。
社会に冷たくしても、ミサトに冷たくすることなんて出来なかった。
ミサトだけは特別。ミサトがいれば、私は変われることができる。
ミサトのような人が、まだこの世にいると、信じることができる。
徐々にだけど、私は変わっていった。

そして……ミサトも変わることになってしまった。

“不幸と幸せは背中合わせ”とは、よく言ったもので……人間は簡単に壊れてしまう生き物。

人間は、生物（なまもの）だ。

生物（なまもの）は、簡単に腐ってしまう。腐って、食べられなくなって、見捨てられていく。

人間と言う名の生物（なまもの）は、腐るタイミングが人によってバラバラである。

いつ腐るか分からない。賞味期限、消費期限が分からないのだ。

不幸は腐ること。

ミサトが、腐ってしまった。

★★★★★★★★★★★★★★★

中学二年生の夏休み。

それは、突然だった。

「み、美魅……お父さんとお母さんが……」

私は、その日発売の欲しい本があったから、夕方に本屋に行った。

二時間くらいで、家に帰ってきた。まだ外は明るく、ひぐらしも綺麗に鳴いていた。

玄関を入ってすぐに、私の姉であるミサトが、顔を真っ青にして私を出迎えたのは、忘れられない。

「ミサト？」

「お父さんと……お母さんが……トラックに……」

「えっ？　何？　落ち着いてミサト、いったいどうしたの？」

ミサトはカタカタと震え、今にも発狂しそうなくらい不安な状態だった。

「交通事故にあって……重傷で……病院に運ばれたって……今さっき電話が……」

「っっ！？」

リビングに通じる廊下に、家の親子電話の子機が転がっているのが分かった。

私はミサトから離れて、子機を拾い、耳をあてた。

『もしもし？　どうしましたか？　大丈夫ですか？』

まだ電話は繋がっていた。

電話がきたのは、私が帰ってくる少し前なのかもしれない。

「もしもし、すみません」

『あ、ミサトさんですか？　大丈夫でしたか？』

電話の相手は、女性だった。
落ち着いていて、聞いているこっちは、何故か安心できるような声たまった。

「いえ、違います。私はミサトの弟の美魅と申します。ミサトは今、少し混乱しているので……私が」

電話の相手は、病院の人だか警察の人だか、忘れてしまった。
だけど、事故のことを詳しく話してくれたので覚えている。

簡単に言うと、私の両親は大型トラックに殺された。

詳しく言うと……乗用車に乗っていた両親。運転していたのは父親。
助手席には母親。
お互い再婚して一年目だから、まだ愛は冷めてはいなかった両親は、2人きりでなにかと車で出かけていた。
そんないつも通りが、いつも通りにならなかった。

大型トラックの運転手は飲酒運転をし、居眠りをしていた。そして、中央線をはみ出してしまい、対向車線に侵入し、両親の車と……正面衝突した。
そして、その他の車も数台巻き込んだ。

両親は病院に運ばれたが、死亡。
大型トラックの運転手は軽傷。
他の巻き込まれた人々も、不幸中の幸いか、軽傷だった。
私達の両親だけが……この世から旅立った。

「美魅……美魅……お父さんとお母さんが……うぁ……うぁぁぁぁぁぁぁ……」

この事件がきっかけで、ミサトは少しずつ狂っていった。腐っていった。

私が信頼したミサトが、少しずつ狂い、もはや別人になってしまうほどに……。

美魅ストーリー〜2〜

「残念ながら……ご両親は、お亡くなりにました」

別に、悲しくはなかった。
あ、そう。……で？
という気分だった。

元々、私は両親の愛情を拒み続けてきた人間だった。
“両親”っていうのは、血が繋がっているだけで、他人は他人。
私を産んでくれただけ。
育ててくれただけ。
別に感謝してないわけじゃない。
ただ、拒んだだけ。

悲しくもないし、苦しくもない。
“無関心”。
“親しくもない隣の家の誰かが死んだ”くらいのレベル。

薄情ものと言われても、私は違うと言う。
情なんて、私には存在しないから。薄くも濃くもない。しいていうなら透明。
無情とでも言うのかな。
いや、でも面白いことがあったら笑うし。好きなもの食べてたら幸せだし。可愛い服見つけたら、欲しくなるし。

ミサトと話してる時は笑えているし、幸せ。
無情ではない。
ただ、“愛”には無情なのかもしれない。
何故かは分からない。
“愛”を理解できないのか、理解しようとしないのか。
分からない。
でも、1つだけ“愛”について言える。
どこかで聞いた言葉で、受け売りの言葉だけど。
“愛”は“狂”である。

そして……両親が死んで、沢山の問題が私達を襲った。
両親を失った私達を、別に親しくもない、親戚達のいったい誰が引き取るのか。
ミサトは大学をどうするのか。
生活費などを、どうするのか。
住んでいる家はどうなるのか。
そもそも、事故を起こした運転手との問題をどうするのか。
まだまだ問題は沢山あったが、全て言うなんて気が狂う。
そんな沢山の問題の中で、一番問題だったのが……ミサトだった。

事故以来、ミサトは笑顔を見せることがなかった。魂が抜けたように、空っぽなミサトだった。

心配する私に、ミサトはいつも一言だけ言って終わる。

「大丈夫。美魅は何もしなくていいから。いつも通り、学校に行って、いつも通りの生活をしていて……ね」

その言葉通り……私はいつも通り、中学校に通い続けることが出来た。

ただ、両親がいなくて、ミサトが笑わないだけの生活。

それ以外は……不気味なくらい、いつも通りだった。

その不気味さが……苦しみに変わるのは、そんなに時間が掛からなかった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★

中学校の私がいる教室。

誰にでも冷たく接する私に、友達なんかいるはずもなく、休憩時間はいつも机に座って窓の外を眺めていた。

自慢じゃないけど、私は学校の席が、産まれて一度も窓際以外の席になったことがない。

「春木君、元気無いのね」

「えっ？　あ……」

いつもどおり、私が窓の外をボーッと眺めていたら……名も知らないクラスメイトが私に話しかけてきた。

女の子で、第一印象が“フワフワした女の子”だった。
栗色の、ウェーブがかかった長い髪。小型で可愛らしい顔。つぶらな瞳。笑顔がとても似合う人だった。

「あ、私の名前？　ぶー……クラスメイトなんだから、知っといてほしかったなぁ」

「……ごめんなさい」

「ううん。いいんだよ！　今から覚えてもらったらいいんだから！
僕の名前は、愛十（あいと）。よろしくね」

「……うん」

どこかしら……愛十からミサトと同じ雰囲気を感じた。
ミサトと出逢った時と同じ雰囲気だった。

「クスクス……」

「何で笑ってるのよ……私何か可笑しいことしたかしら？」

「ううん、ごめんなさい。だって春木さん、いっつも皆に冷たくしてたから、こんな無防備な春木さんが珍しくてさ」

「……無防備」

「僕は、今の春木さんがいいけどなぁー」

「ばか、そんなお世辞を言っても、何にも出ないわよ」

不思議と、私は愛十と絡んでいて嫌じゃなかった。本当にいつの間にか、馴染んでいた。

「えーっ……世辞じゃないのに……春木さんは、優しいほうがいいんだから！」

「ふーん、そう……」

優しい。この私が……人に優しく？　無理ね。そんなこと、出来るわけないじゃない。

私が変わったといっても、そこまで変わることは出来ない。

白バラをペンキで赤く塗っても、根っこは白バラの根のまま。

元は変わらない。

「ねぇ、春木さん」

「何かしら？」

「名前で呼んでいい！？」

「……それくらい、好きにしたら？　私は何て呼ばれようと、気にしないから」

「やったー！　やっぱり美魅ちゃんって優しいー！」

「それくらいで優しいって……ふふっ」

やっぱり、愛十は少しズレた子なのかもしれない。けど、やっぱり嫌じゃない。

「あ！　今美魅ちゃん笑ったでしょ！？」

「……さぁ」

「もう一回！　もう一回笑って！　写メ撮るから！」

「意味が分からん！」

「そのまんまの意味だよぉ！　さぁ、美魅ちゃん！　貴方の眩しい笑顔は僕の待受画面になるのだぁ！」

「キモい！」

「ふべぇ！？　あーん……僕の携帯とらないでぇー！　かーえーしーてーぇぇぇ！」

泣き出してしまった愛十。
やり過ぎたとは微塵も思っていない。

端から見たら、私達はどんな風に見えていたんだろう。
やっぱり……友達に見えたのかな？
友達なんて……中学生に上がってから、作らなくなった。
っていうか、友達を“作る”って……何様って感じかな。
意味的には、あってんだろうけど……やっぱり“作る”って“物を作る”のイメージが強いからなぁ。
人間は物じゃないし、友達が無機質な冷たい意味に感じる。

やっぱり、友達は“親しくなる”だと思うなぁ。

「あり？　美魅ちゃんどったの？　何か急に静かになったよー？」

「えっ？　あ、いや……何でもないわよ……ほら、携帯返してあげるから、泣かないの」

「えへへ～。やっぱり美魅ちゃん優しい」

「はいはい……ありがと」

この後、愛十から聞いたのだけれど……私が最近元気が無いみたいだと、クラスメイトから心配されていたらしい。

……何を今さら、クラスメイト面しているのだと、私は呆れた。
今まで散々私に冷たくされたくせに、私の心配をしていた？
『どんな人でも、クラスメイトなので僕らの仲間なんだ』って言いたいのか？　善人になったつもりか？　偽善者共が。
どこの王道漫画だよ。王道漫画なら、週刊で連載している漫画雑誌にでもやってなさいよ。

……っと、今までの私なら思っていた。そう……ミサトに出会う前までの私なら。
それこそ、王道漫画な展開なのだろうけど……それで構わない。

――“嬉しかった”。

たとえ偽善であっても、クラスメイトが私を心配していた……存在を認知していたことに……“嬉しかった”。不思議な気持ちだった。

胸の奥か喉の奥か、はたまた両方に、ムズムズとした何かが溢れてきた。声にはならない唸り声が出かけて、ひっこんだ。

多分……これが“嬉しい”と言う気持ちなんだと思う。

私は……嬉しかった。

それが切っ掛けになったのか、愛十を中心に、何人かのクラスメイトと親しくなっていた。

本当に自然と親しくなっていた。

自分でも笑えるくらいに、“友達”の存在が暖かく感じていた。

とても大きな存在になっていた。

特に、愛十の存在は……群を抜いていた。声をかけてくれた日から、私の周りに存在し続けた。

その存在は、ミサトと同じくらい大切な存在になっていた。

だけど……愛十とミサトは、磁石のSとNだった……。

2人は……決して交わることがなかった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

私は中学三年生になり、暖かくなってきた5月中旬。

「こんな時間までいったい何をしていたの！？」

「っっ……ミサト……？」

“その日”は突然やってきた。

その日は、土曜日の夜１０時過ぎだった。
１８歳未満は、１０時以降に外をぶらついてはいけない。
学校からもミサトからも言われていたが、その日は愛十の家で晩ごはんをごちそうしてもらっていて、あまりにも居心地がよく、ギリギリまで遊んでいた。

「私がどれだけ心配したと思ってるの！？」

「え……でも……ミサトにメールしたよ？」

“友達の家で遊んできまーす！　晩ごはんは、いらないから！”……と、メールをしていた。

「あれだけの文章で、納得するわけないでしょ！　それに……何回も電話したのに、電話も出ないなんて！」

さっきも言ったけど、愛十の家は居心地がよくて、携帯も時計も気にしなかった。
帰り道も、愛十の家での出来事を思い返しながらだったから、携帯なんて見なかった。

「ご、ごめんなさい……」

「バカ……美魅に何かあったら……私……私……！」

ミサトは涙を流し、ボーッと突っ立ってる私を抱き締めた……。
抱き締める力に、色んな想いが込められていた気がした。

「私には……もう家族は美魅しかいないの……美魅がいなくなったら……私……」

ミサトの涙が私の頬に落ちる。
暖かい涙が、頬を滑り落ちるにつれて、冷たくなった。
まだ涙は止めどなく落ち続ける。

「ごめんなさいミサト……本当にごめんなさい」

両親が死んで、一番精神的にショックだったのはミサト。
家族想いで、誰よりも家族を大切にしてきたミサト……。両親の死は絶望だったに違いない。

だから、いつも以上に過剰な心配性になるのは、当たり前の行為。
それを、初めて友達の家で晩御飯をごちそうになれると舞い上がってしまい、そんな当たり前のことすら忘れていた。
だから私は……謝ることしかできなかった。

「美魅……約束して……“私の側からいなくならない”って」

“約束”。
それは、人を縛り続ける行為。
……分かっていた。
だけど、私はもう一度ミサトに笑ってほしい。“約束”することによって、ミサトが少しでも救われるのなら……。

「うん。約束する。だから、安心して……ね？」

「……分かった。美魅、約束破ったら……おしおきだからね」

「あはは……それは怖いわね。ミサトの事だから、それは恥ずかしいおしおきなんでしょうね」

「当たり前よ、バーカ。トラウマを植えつけてやるんだから」

「あはは……」

その日から……私は友達と遊ぶ時間を減らした。減らした時間を、ミサトと一緒にいる時間にあてた。
まだミサトを、家に1人にしてはいけない。だから、“家族”である私が、ミサトの心を癒してあげたい。
今は……友達よりも、ミサトが大事だから。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「美魅……一緒に寝ない？」

「へ……？」

ある日の夜。

私は部屋で本を読んでいた。

すると……枕を持った寝巻き姿のミサトが、部屋に訪れてきた。

「い、一緒にって……」

「や、やっぱりダメかな？　そうだよね……この年になって、お姉ちゃんと寝たくないよね……」

枕をギュッと抱き締めて、しょんぼりするミサト。……そんな顔をされたら、私が悪いみたいだった。

「はぁ……いいよ。今日は寂しがりなお姉ちゃんと寝てあげる」

「ホントに……？　嫌じゃない？」

「アンタから誘っといて、それはないでしょ。……ほら、おいでミサト」

まだ読みかけの本を閉じて、ベッドにミサトが眠れるだけのスペースを空ける。

「えへへー……ありがとう」

ミサトは満面の笑みで、私の布団に入ってきた……そして――

「美魅ー！　にゃふふー」

「っこら……！　ミサト……」

布団に入るやいなや、ミサトは私に抱きついてきた。

「美魅に抱きつくの久しぶりー！」

「バカ……っ……ちょっ……どこ触ってんの！？」

「美魅の脇腹柔かーい」

「っ……もしかしてミサト……“呑んでる”！？」

「ふにゃ～？」

よく見れば、ミサトの顔が紅い。そして、仄かにお酒の臭いがする。

「えへへ～。美魅～」

「っ……頬擦りしないで！　ちょっ……どさくさに紛れてお尻触んないでよ！」

「一緒に寝るの楽しい～」

「寝てないでしょ！」

「ん～……いけずぅ。いけずな子には、お仕置きしちゃいます！」

ミサトは私の目を見つめて、どんどん顔が近づいてくる。
お互いの唇と唇が近づいている。

「え！？　ミサト……まって！　まっ……――」

経験したことのない、暖かい感触と柔らかい感触が、私の唇に触れた。そして、時間が止まったかのような感覚に襲われる。
頭の中は真っ白で、目の前も何を見ているのか理解出来ない。
だけど、身体にはミサトの体温がしっかりと感じる。

だんだんと理解してきた……。
私のファーストキスが、ミサトに奪われた事を。

「えへへ～。美魅とキスしちゃったー」

「っっ……」

ミサトは笑っていた。
姉弟の関係である私とキスをしたというのに、笑っていた。
だけど、私は笑っているミサトに、何も言えなかった。

だって、この日のミサトは……久しぶりに笑顔を見せてくれた……。
ずっとずっと待ち焦がれていた、ミサトの笑顔。たとえお酒の力だとしても、ミサトの笑顔だった。

この笑顔を……壊したくなかった。

「ねぇねぇ美魅～」

「な、何よ……」

「“もう一回”しよー？　美魅とのキス気持ちいい～」

「えっ……それは……」

「してくれないの……？」

ミサトから笑顔が消えた。
またしょんぼりとした顔になる。
せっかくの笑顔が……消えた。

「ミサトが……それで笑ってくれるなら……」

「いいってこと！？　やったー！　うへへ～、美魅ぃ～」

「っ……」

ミサトの激しくも優しい行為が、しばらく続いたのち……ミサトはそのまま寝てしまった。
本当に幸せそうな寝顔で……。

「ミサト……」

私は無意識にミサトの頭を撫でていた。ミサトの髪はサラサラしていて、撫でている身なのに、嬉しくなってしまう。

「大丈夫……私がミサトを守ってあげるから……。ミサトがもっと笑えるように、私は何でもするから……だから……」

……昔のミサトに戻ってほしかった。お酒なんか飲まなくても、自然と笑えるミサトに……。私に変わるきっかけをくれたミサトに……戻ってほしかった。

でも……私は間違っていた。
全てを、間違えていた。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「美魅ぃ～」

「っわぁ！？」

「美魅っていい臭いがするよね～」

「だからって突然抱きつかないでよ……だ、抱きつくなら一言言ってからにしてって……いつも言ってるでしょ……」

“あの日”からミサトは笑顔を見せるようになった。
それと同時に、抱きつく・頬擦りをする・キスをせがむ……などの行為を、私に求めてくるようになった。

“あの日”の記憶が……お酒の力をもってしても、ミサトには鮮明

に残されていた。

「一言言ったら、してもいいんだ？　じゃあ……キスしよ」

「っ……ま、また？」

「いいじゃーん。姉弟のスキンシップだよ～」

「姉弟にしては、激しすぎない……？　ってか本当は姉弟でこんなこと……」

「もう今さらだよ……美魅」

「っっ……」

「美魅……“好きよ”」

“今さら”、そう……今さらだった。私達はもう、元の姉弟には戻ることができなかった。

何故なら……ミサトの中での私に対する“家族愛”だった感情が、“異性愛”に変わったから……。

いつかは分からない。気づいた時には、遅かった。

私が、ミサトの求める事を受け止め続けていた結果が……私を“異性”として見るという結果を生んでいた。

間違いを正そうとすれば、笑顔が消えて。

笑顔を守ろうとすれば、間違った関係になっていく。

「美魅は、私のこと……好き？」
「な、何なの……突然」
「いいから答えなさい」
「っ……“姉”としては好きよ」
「違うわよ！　バカッ！」
「な、何が違うの！？」
「“女”として、好きかどうかを聞いてるの！　まったく美魅ったら、男の娘なのに乙女心を分かってないんだから」
「女として……って」
ミサトに言うべき答えは分かっている。“好き”って言えば、笑顔を守れる。でも……それだと間違ったままになってしまう。
「嫌いなの……」
「ち、違う！　す、好き……ミサトの事は……女性として魅力的で、好きだから！」
「ほ、本当に？　えへへ～。じゃあ私達、両思いだね！」
「そ、そうね……あはは……」

何を間違ったのか、考えること事態が間違っていた。考えるも何も……間違った答えなんて、存在するはずが無い。間違った答えは、答えじゃないから……。答えは、正解しないと答えじゃない。つまり、私には最初から……正解なんて無かった。むしろ、間違いしかない。

私が生きていること事態……間違いなのだから。

「美魅、服を脱ぎなさい」

「えっ……？」

「えっ？　じゃないでしょ。私達は両思いなんだから、夜は“愛し合う”ものでしょ？」

「ちょ……ちょっと待って！　ミサトが何を言ってるのか意味が分かんないよ！」

「そのままの意味。さ、早く脱ぎなさい。あははっ、緊張するわね……私も初めてだから」

「だから待って！　ミサトおかしいよ！　そんな……ミサトが言ってる事って……その……近親相……っ」

「……してくれないの？」

ミサトの目が……いつも以上に光を失い……笑みも、氷のような冷たい無表情に変わった。
見たことのない……見たくない表情だった。

「っ……」

ミサトの為なら……何でもする。何でもしてあげる。何でも……捨てる。
そう決めたはずなのに……私は怖がっていた。近親相姦をしてしまえば……その先に光なんて無い。未来なんて……存在しない。

「美魅も……私を捨てるの？」

「っっ！？」

「私を……一人にするの？」

「……しないよ……」

でも……私の未来なんて……ミサトが笑わない未来よりも、価値なんて無い。
私の未来は……ミサトがまた笑ってくれる未来。

「ミサトを……一人になんかしないよ……。ミサトの側には、私がいてあげるから……ね？」

「……えへへ、そうだよね！　美魅がいてくれるよね……。美魅、愛してる……だから、愛し合おう？」

「……うん。ミサトが……それを望むなら……私は……」

“もう一度笑顔が見たい”ただ、それだけの願いだった。
他に何も望んでなかった。
笑ってくれるなら、たとえせっかく親しくなった友達が、前みたいに親しくなくなってもよかった。
何なら、五感もいらない。四肢もいらない。

ただ……ミサトにもう一度笑ってほしいだけだった……。

もう一度……。

美魅ストーリー～3～

「美魅ちゃん、元気無いよ～……？」

「……そんなことないわよ？　ほら、私はすこぶる元気じゃない」

「無理してる気がするぅ……」

「馬鹿言わないで。私は何とも無いから、愛十は“勉強”しなさい」

愛十の家で、私達は“受験勉強”をしていた。いや、違う。試験勉強をしているのは、愛十だけである。

愛十は、私が推薦で受かった“水の都高校”の受験に向けて、勉強をしていた。

いや、私が推薦で受かった……は、表向き。本当は、ミサトが“水の都高校”の理事長になったから、その“コネ”で私は水の都高校の“裏口”から入った。

愛十は、私とまだ一緒に通いたいという理由で、水の都高校を受験するつもりらしい。

ちなみに水の都高校は、そこそこ頭の良い進学校で、偏差値も高い。私は受験しても余裕で合格するが、愛十は難しい。愛十は勉強が嫌いなので、頭も良くなく、水の都高校は諦めろと教師にも両親にも言われたようだ。

でも……愛十は頑張っていた。

「うぅ～……ぁぁ～……」
文字通り、頭から煙を出しながら問題集と教科書を、にらめっこしている。
「うぅ……分かんない！」
「何が分からないの？」
「何が分からないのかが分かんない！」
「末期的ね……」
愛十は数学の問題を解いていたのだけど、苦手な所なのか、公式も何もかも分からないらしい。
「ほら、見せてみなさい」
私は愛十に教えやすいように、愛十の隣に座る。問題集を覗きこむので、自然と愛十の体にくっついてしまう。
まぁ、これくらいは仕方ないでしょ。
「っっ……」
「どうしたの愛十？　何か頬が紅いじゃない」
「な、何でもにゃいよ！　あは、あはは！」

「ん？　まぁ、いいけど……。ほら、教えるから、ありがたく思いなさいよね」

「うん！　ありがたやー！　美魅ちゃんは女神様ですー！　いや、男の娘神様ですー！」

「はいはい。さっさとペン持ちなさい」

愛十はまた煙を出しながら勉強を再開した。私は、頑張る姿の愛十に思わず笑みをこぼしてしまったけど、仕方ないこと。だって……愛十の頑張る姿が、凄く眩しかったから。

……この日は1月。
受験日は1ヶ月後の2月中旬。
卒業式は3月の頭。
私達は、笑って卒業したかった。
そして……また一緒の時間を過ごしたかった……。

★★★★★★★★★★★★★★★

とある夜。この日も愛十の勉強を見に行っていた日だった。
ミサトは私の部屋に入ってきて、何やら不機嫌そうな顔だった。

「最近、家にいないけど……どこに行ってるのかしら？」

「と、友達の家よ。友達に勉強を教えに行ってるの」

「ふーん……私よりも友達が大事なんだ……」
不機嫌な理由は、私が最近ミサトに構っていないから。
晩ご飯ギリギリに帰ってきて、勉強を教える事に慣れてないせいか、眠たすぎて夜寝るのも早い。だから、ミサトとの会話もあまりしていない。
「何拗ねてるの？　仕方ないじゃない。その子受験が近いんだし、少しでも力になってあげなきゃ」
「ふーんだ。美魅には何の徳にもなってないじゃん」
「徳って……。別に徳なんか求めてないから。それに、教える方も勉強になってるのよ？」
「高校決まってるのに、今さら勉強なんて意味ないじゃん……遊べばいいのよ」
「それって、高校の理事長が言うセリフ？」
「ふーんだ……まだ理事長じゃないもーん」
まだミサトはまだ、あくまで“理事長代理”という肩書き。しかし、やっていることは理事長の仕事で権力も理事長と同じ。
母親が死んで、新たな理事長となった人が、母親の部下である“副理事長”だった。
しかし、副理事長は自分が理事長になることを、自分自身では認めていなかった。
母親の次になるべき理事長は、ミサトだと副理事長自身が、決めて

いたから。
正式には副理事長が、現在の理事長で、ミサトは“理事長代理”。
いつでもミサトが、理事長になってもいいようにと……。
「そんなことより……美魅」
「ん？」
「久しぶりに……“しよ”？」
ミサトはベッドに座り、私に近づいてくる……。目は女の目になっていた。
「ちょ……今？」
「今以外に、いつなのよ……」
ミサトはいつの間にか、私に覆い被さるような形になっていた。
「きょ……今日は疲れていて……ちょっと遠慮したい……かな？」
「それ、前にも聞いた。……もしかして、私としたくないの？」
「そ、それは……」
したくないに決まってる。
近親相姦なんて……異常以外の何物でもない。……分かってる。ミサトとの関係が続くにつれて、回数を重ねるにつれて、ミサトがだんだんと“歪んでいる”ことも分かってる。でも……。

「……そんなこと、ないよ。私も……ミサトと……」

「にゃふふ、そーだよね！　ミサトは嬉しいぞ！」

体が自然と震えてしまう。
回数を重ねるにつれて、恐怖も積み重なり続けている。トラウマと言っても間違いではない。

「美魅……愛してる」

何度も交わしたキスを、今日もまた交わる。濃く、深く、激しく……。
愛してるの言葉も、何回も聞いた。耳元でも、繋がっている時でも。
まるで呪いの言葉みたいだった。

今日もまた……いけない関係を築いていく。この関係は、２人だけの秘密。
ミサトも心の奥底では、これは常識から外れている関係だと理解している。だから表には出していない。出すつもりも無い。
いつか……秘密が漏れ出すまで。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「き、緊張するよぅ……！」

「ふふっ、ほら気張ってきなさいよ！　私が応援してるんだから、

受からないと承知しないんだからね！」

試験日当日。
私とミサトは試験会場である水の都高校に来ていた。

「も、もし……一問も解けなかったら……ど、どうしよぅ」

「そんなわけないでしょ。アンタ、今まで何を勉強してきたの？」

「そうだよね……うん。美魅ちゃんが家庭教師してくれたんだもん……こんな僕でも、頑張れるよね……」

愛十は受験票を握りしめ、震える体で会場の教室へと歩き出した。
私は会場へは行けない。
学校の中にあるロビーで待っていることしかできない。
試験が終わるまで、愛十とは会えない。だから……――。

「あいとぉー！」

私は愛十の背中めがけて、今まで出したことない大声を出した。

「は、ふぁい！？」

愛十は慌て振り返り、目をぱちくりさせて、キョトンとしている。
友人が、聞いたことのない大声を出していたから、ビックリしてるんだと思う。

「私、信じてるから！　きっとまた、愛十と一緒に過ごせるって！」

「っ……あはは。僕もだよ！」

「えへへ。嬉しい……。いってらっしゃい！」

「いってきまーす！」

再び愛十は、校舎の中へと入っていった。愛十の後ろ姿は、自信と希望でいっぱいだった。

私はその姿を見て、自然と笑顔がこぼれていた。

「美魅、何してるの？」

「っっ！？　み、ミサト！？」

後ろから、冷たく嫉妬に満ちた声が、私の背を氷らせる。後ろには、スーツ姿のミサトがいた。ミサトは、冷たい目で私を睨んでいた。

「朝からいないと思ったら……こんな所に来ていたの？」

「ミサト……何で……」

「私はこれでも理事長代理なのよ？　試験なんだから、学校に顔を出さなくてはいけないの」

「あ……」

うかつだった。愛十の事で頭がいっぱいだったから、ミサトが今日学校に来ることを忘れていた。

「ところで……さっきの子は、誰？」

ミサトの嫉妬の矛先は、愛十だった。

「と、友達よ……」

「あぁ、いつも無駄な勉強を教えに行っていたのは、あの子のせいだったのね」

「む、無駄って……そんな言い方は無いでしょ！？」

「黙りなさい」

「っっ……」

ミサトはため息をついて、さらに私に近づいてくる。その目には、私しか映っていなかった。

「あの子の名前は？」

「……知って、どうするのよ」

「どうするかは、私の勝手。私の学校の生徒に“なるかもしれない”子なのよ？　よーく、知っておかないと、ね？」

ミサトの言葉からは、そんな事など微塵も感じられなかった。感じたのは、嫉妬と敵意。愛十に何かする気だと、私は感じた。

「……嫌だ」

「何ですって！？」

「だから、嫌だって言ってるの！　アイツは私の友達なの。友達に何かしようって言うなら、私たとえミサトでも許さない！」

私は睨んでいた。ミサトを精一杯睨んでいた。だけど、体は震える。だけど、ミサトの恐怖を知っているからこそ、私は愛十を守りたかった。

「……可哀想に。あの糞ビッチに何か洗脳されたのね……」

「え？　何言って……」

「私はそろそろ行くわ。そろそろ試験が始まる時間だしね。また、後でね」

「あ、ミサト！？」

ミサトも校舎へと歩み出した。ミサトは一度も振り返ってくれずに、入っていってしまった。

「何なのよ……いったい」

私は心の中に何かの蟠りが残ったまま、愛十を待つことしかできなかった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「入って入って！」

「ちょっと……そんなに引っ張らなくても大丈夫よ。どこにも行かないから」

試験日から数日後。
私は愛十の家に来ていた。
試験の合否が届いたのだという。
まだ愛十は中身を見ていない。合否の結末を、私と一緒に見たいからだとか……。

「うぅ……心臓が痛いくらいに、バクバクしてるぅぅ」

愛十の部屋に入ると、真ん中に置いてあるガラスで出来た小さなテーブルがある。その上にちょこんと、分厚い合否の封筒が置かれていた。
この封筒の分厚さは……うん。合否が、封筒の分厚さを見れば、中身を見なくても分かる自分がいた。いや、自分だけでなく、ほとんどの人が分かると思う。
だって、合格者には色々な書類が入ってるから、かなり分厚くなる。
逆に薄っぺらかったら、不合格を伝えるだけの紙しか入っていない。
でも、愛十は分かっている顔ではなかった。うん……やっぱり愛十は愛十だ。

「あ、開けていいんだよね！？」

「当たり前でしょ。開けなきゃ、何も始まらないんだから」

「う、うん……っ。ぅく……ぁう……」

愛十のプルプル震えている手。
なかなか開けようとしない。
「み、美魅ちゃんが……開けてくれないかなー……なんて……」
「嫌」
「だ、だよねぇー……ふぁぅ……」
「何を怖がってんのよ。別に不合格だってもいいじゃない。不合格だったとしても、あ、愛十とは……その、友達なのは変わらないんだから……ね」
「……えへ、えへへ……そうだよね！　美魅ちゃんは、僕の友達なのは、変わんないもんね！」
怖がっていたはずの、愛十の目が……いつも通りの目に戻った。
バーカ。貴女に、恐怖なんて言葉は必要ないのよ。貴女には……笑顔が似合ってるんだから。
「っ……よし！　あ、開けるよ！？」
愛十は、丁寧に封筒を開けていく。結果が分かっている私も、何故か緊張してしまっている。まるで、愛十と心が通いあっているような……。
そして、愛十は中身を取り出し、一番上にあった合否の紙を見た。
「っっ！？」

「愛十……？」

チラッと横から覗いてみると……そこには、“合格”という文字が、でかでかと黒字で強調されていた。

「やった……やったじゃない！　合格よ！？　愛十、合格したのよ！？」

私は喜びのあまり、愛十の両肩を持って、私と愛十を向かい合うようにした。

そして私は、愛十と向かい合って、初めて気づいた……。

「っ……っく……っひ」

愛十の目から涙が溢れていた。顔も紅く染まり、今まで溜めていたものが、溢れだしたようだった。

「愛十……」

「ごめんっ……なんか……安心したら……急に……」

「ううん。いいのよ、泣いて。愛十、頑張ったもんね。辛くても、頑張ったもんね」

私は愛十の頭を、優しく撫でていた。ほとんど無意識だった。

目の前にいる愛十の姿が、とても眩しく見えた、とても愛らしく見えた。

……いいなぁ。私も、愛十みたいなキラキラした体験をしてみたいなぁ。

「……えへへ。夢みたい……」

「私も、こんなに笑えるなんて夢みたい」

私も笑顔になっていた。

愛十といれば、とても優しい笑顔が自然と出ていた。

「ありがとう……愛十」

「ふえっ？　ぼ、僕お礼言われる事何かした？」

「うん。いっぱいしてくれた。愛十……大好き」

「ふぇ……っ？」

「あ……――――っ」

いっきに顔が熱くなるのが分かった。そして、さらに後悔と自分への怒りが込み上げてきた。

無意識だったとはいえ、突然あの台詞はあり得ない。

「い、いや、その……違うの！　今の好きは、友達としてって意味で……別に深い意味は……」

「美魅……ちゃん」

「愛十……？」

必死になる私とは裏腹に、愛十は頬を紅くしてボーッとしていた。

「嬉しいよ、美魅ちゃん。僕も、美魅ちゃんが大好きだよー」

「っっ……」

また顔がボッと熱くなる。そして何だか、体が変な感じになっていく。

「えへへ、美魅ちゃん」

「っちょっと……愛十？」

愛十は突然私の頭を撫でてきて、私を抱き寄せた。優しく包み込むように私を抱き締める愛十。撫でられる頭が、少し気持ちよくなってきていた。

「美魅ちゃんって、女の子よりも女の子だよねぇー。えへへ。ちっちゃくて、かぁいいよ」

「ちっちゃいって言うな……！　っていうか、何してんのよ……！？」

「愛でてるんだよ～」

「は、恥ずかしいから離しなさい！」

「え～……嫌だよぅ」

「っっ……」

愛十が急にデレた。今までこんなこと無かったのに。恥ずかしいけど、少し嬉しいのは否定できない。愛十みたいな可愛い子に、こん

なことをされて喜んでいる私は、やっぱり男なんだと感じてしまう。

「美魅ちゃん、僕幸せだよ」

「……わ、私も……？」

「何で疑問系？」

「う、うっさい！」

「えへへ、かぁいいよ～」

「ばか……」

私と愛十の、目と目が自然と合う。ジッと、吸い込まれるように合い続ける。ドキドキと、鼓動がうるさい。

「んっ……美魅ちゃん」

「……ぁ」

目だけでなく、唇も吸い込まれるようにお互い距離が近くなる。そして……その距離が零になった。

唇と唇が触れ合うだけの、幼稚なキス。しかし、幼稚だけど愛が存在していた。

「美魅ちゃん……好き……僕、美魅ちゃんのことが好き」

「っ……それは、嬉しいけど……」

「……ダメなの？　僕じゃ美魅ちゃんの彼女になれない？」
「そ、そんなことは……ないよ……」
「じゃあ何で？　僕は美魅ちゃんが好き……美魅ちゃんは？」
いつもの愛十なら、自分の意見や意志なんて二の次。他人が自分のせいで、困らせないようにしていたのに……この日の愛十は意志が強かった。
ごまかす程度じゃ、引き下がる要素がどこにもない。
「黙ったままじゃ、嫌だよぅ……」
「と、友達のままじゃ……ダメ？　……かな……あはは」
「……僕は、ヤだ！」
「っっ愛十！？」
愛十は感情のあまり、私をカーペットが敷かれた床に押し倒した。
私は両腕を掴まれて、身動きがとれるような状況ではなかった。
「僕は……僕は……ずっと美魅ちゃんを、こうしたかったんだよ……」
愛十の体は震えていた。後悔と不安と興奮で、表情が一つに定まらない、曖昧な表情になっていた。
「僕と一緒に勉強してる時とか、美魅ちゃんが隣にいるだけで、感情が押さえられなかったんだよ……。でも……我慢してた……。美

魅ちゃんの困る顔が見たくなかったから……」

「愛十……」

「でも……今日はダメなの……我慢できないの……。美魅ちゃん……嫌なら、抵抗してね？　直ぐに止めるから……」

「っっ……！」

愛十は押し倒した時とは裏腹に、優しく頭を撫でたり、腰を撫でたりした。

「服、脱がして……いい？」

「……っ」

「えへへ、いいんだよね？」

着ていた長袖のTシャツの裾から、愛十の冷たくて細い手が入ってきた。上着は脱いでいるので、今着ているのは、Tシャツ一枚だけ。これを脱がされたら、私の上半身は裸になる。しかし、愛十はそれを望んでいる。

愛十は何の躊躇いもなく、Tシャツを剥ぎ取った……――。

「――――えっ？」

しかし、愛十の手の動きは止まった。愛十の目が、有り得ないものを見たような目に変わっていた。

「愛十……？」

「美魅ちゃん……これ、何？」

「……えっ？」

愛十の目線の先には、私の胸周辺。そこには……――。

「これって……キスマーク……だよね？」

鎖骨から鳩尾付近までの間に、小さな内出血がいくつもあった。それはまるで……強くキスをされたような痕だった。

「っっ！？　み、見ないで！」

私は愛十を突飛ばし、脱がされたTシャツを抱えて、もう見えないように隠した。

「み、美魅ちゃんって……その……恋人がいたんだ……あは、あはは……。ゴメンね……彼女いるのに、こんな僕なんかが変なことしちゃって……」

愛十の表情が、だんだんと笑顔が失われていく。

「ちが……違う……これは」

これは……おそらくミサトに付けられたもの。ミサトは、恋人じゃない。ミサトは……家族。だからこれは……違う。

「……もう、会わないほうが……いいよね」

「違っ……私に恋人なんかいない！」

「じゃあ、それって……何、かな？」

「っ……これは……」

愛十は、口どもる私に笑顔で答えた。

「言えないってことは、そのキスマークの意味を認めるってことだよ……。あはは、恋人じゃないけど、恋人になる人がいたんだね……」

っっ……言えない。愛十に嫌われたくない。だから……本当のことが言えない……。汚れた私を……見てほしくない。

「さ、今日は……もう遅いし、帰ったほうがよくないかなっ？　その、美魅ちゃんのお姉さんも心配するし……ね？」

「っっ……」

私は何も言えずに、ただ愛十の手を見つめることしか出来なかった。……まだ心の準備が出来てなかっただけ。

だけど、高校も一緒だし、卒業式もあるから、これからいくらでも弁解の余地はある……。

「今日はゴメンね……じゃあね、美魅ちゃん」

「……ううん。また、連絡するから！」

「あはは、ありがと」

「じゃあ……ね」

私はこの日、何も弁解することなく愛十の家を出た。心の準備が出来るのに、そう時間はいらない……はずだった。だから、この日は何も弁解しなかった。

いつでも愛十に嫌われる心の準備さえ出来れば、欠片も残さず話すつもりだった……そう思っていたのに……。

この日から、愛十と連絡がとれなくなった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

「えっ……“転校”……？」

私が事実を聞いたのは、数日後の卒業式だった。

あの日から、連絡がとれなくなった愛十。携帯はいつも電話しても、留守番電話。メールも返ってこない。愛十の家に訪ねに行っても、愛十どころか、愛十の家族すら居なかった。

さすがに卒業式には来るだろうと、高を括っていたが……それは過ちだった。

卒業式にも、愛十は姿を現さなかった。

……そして、クラスメイトから聞いたのは、地獄にでも突き落とされたような事実だった。

「愛十なら家の事情で、転校したじゃん？　あれ……春木さん、あれだけ仲良かったのに、知らなかったの？」

転校。つい先日に、愛十は“高校を転校”した。場所は分からない。家も引っ越したらしく、もうすでに、愛十の家には誰もいない。

また電話をしてみても、今度は電話番号が使われていませんと、冷たい声が返ってきた。

メールも、エラーが返ってきた。送信したメルアドは、存在しないと返ってきた。

番号もメルアドも存在していたはずなのに……存在しなかった。

愛十は……姿を消した。

愛十は誤解したまま、弁解をする間もなく、私の目の前から姿を消した。

★★★★★★★★★★★★★★★

何もない日がやってきた。

何をするにも無気力で、無関心……ミサトとの会話さえ、何も感じなくなっていた。

「美魅？　どうかしたの？　元気ないよ……？　今日のご飯、美味しくなかった？」

「違うよ……何でもない。もうお腹いっぱだから……ごちそうさま」
ミサトが作ってくれたご飯も、喉を通らない日が続いた。
私は残ったおかずを、台所に持っていってラップをした。……捨てるのもミサトに悪いから、翌日のお昼ご飯の時に食べている。
それでも食べきれないときは、申し訳ないけど……捨てる。

「……おやすみ、ミサト」

「ちょっと、美魅！？　お風呂は！？」

「……めんどくさいから、今日はいい」

「そんなこと言って、昨日も入ってないでしょ！？」

「……いいじゃない、別に。もう中学校に行かなくていいんだし、入学式もまだまだ先だし。家から出る予定も無いし……」

愛十と計画していた、春休みの遊びの予定は、愛十と共に消滅してしまったんだし……。お風呂なんか……入らなくても困らない。

「待ちなさい。美魅、最近何かおかしいわよ？　何があったの？」

「ミサトには……関係ないよ」

……ミサトが、キスマークなんか付けなければ、こんなことになならなかったかもしれない……。そんなことさえ思えてきた。
前の私なら、ミサトを悪者に考えることなんてしなかった。でも今は、変わってしまったのかもしれない。

ミサトの笑顔を守る……なんて、今は考えられなかった。
ミサトの笑顔は好き。でも、今心に空いている穴は、ミサトの笑顔でさえ埋められない。

「美魅……何が不満なの？」

「不満……？」

何をいきなり言い出すの？
不満なんて……あるわけないじゃない。

「私は……美魅に幸せになってほしいって思ってる。だから、少しでも力になるよ？」

……力に？
私に幸せになってほしい？
……少なくとも、ミサトに近親相姦をされている現実があるかぎり、私に幸せなんか、やってこないに決まってるじゃない。

……ミサトが笑ってくれるなら、五感もいらない、四肢もいらない、友達もいらないって言ってたくせに……いざ友達がいなくなってみれば、このザマとはね……。
やっぱり私も、ただの人間なんだと感じてしまう。
テレビに映っている無能な政治家と一緒。無様な姿をさらしているだけの人間。

少しのきっかけで、こんなにも変われてしまう。

「もう……せっかく、あの“糞ビッチを学校から追い出して”あげ

たのに……今度は何があったのよ」

「……え――」

ズキッと、頭の真ん中に激痛が走った。そして、小さな痛みの波が押し寄せてきた。

『……可哀想に。あの糞ビッチに何か洗脳されたのね……』

“あの時”、ミサトが呟いた言葉が、突然頭の中に鮮明に映し出された。

「どうかしたの美魅？　突然固まったりしちゃって？」

「今……何て言ったの？」

「ん？　どうかしたのって聞いたのよ」

「違う！　もっと前！」

「え……あぁ、糞ビッチを追い出したって話？　あれー、話してなかったかな？　試験の日に、美魅と馴れ馴れしく話していた、あの糞ビッチを“追い出した”って……」

キーンと、耳鳴りがうるさかった。頭が真っ白になって、頭の中に耳鳴りが鳴り続けているような感覚だった。

「“私の”美魅を何かと連れ出すし、しかも美魅と一緒の学校に来ようするなんて、本当に気持ち悪かったわ。でも、安心してね美魅。邪魔な女は片付けたから」

ミサトの一言一言に、私の中で“モヤモヤ”していた浮遊物が、一塊になっていくのが分かった。
そして、新たな“感情”が生まれ始めたのが分かった。

「その子の……名前って……」

「ん？　名前？　たしか……愛十とかって……言って――――」

ミサトが言い終わるまでに、ミサトの言うであろう言葉が理解できた。
理解できた直後――私は、ミサトに飛びかかっていた。

美魅ストーリー～end～

「――っ、何をするのよ……まったく、この子ったら」

ミサトに飛びかかったけど……それは反射のようなモノで、何の作も無しに飛びかかっただけだった。だからミサトに……簡単にあしらわれた……。

あしらわれた私は、冷たい床へと押し付けられた。両腕を、ミサトの右手で押さえつけられ、私のお腹の上に馬乗りに乗っている。

「“お前”が……お前が愛十を……！」

「……お前？」

「愛十が転校したのは……お前が追い出したからか！」

押さえつけられたくせに、頭の中は怒りで脳が沸騰していた。冷えることもなく、燃えたぎっていた。

「何、その言い方……」

「うるさい！　よくも……よくも愛十を……！」

「……私に向かって、そんな酷い言い方するの？」

「黙れ！　お前なんか……お前なんかいなければ！　愛十は……愛十はいなくならなかったんだ！　お前が……私から愛十を奪ったん

だ！」

「いい加減にしなさい！」

バチンッと、乾いた音が部屋に響いた。そして、右頬が熱く痛みはじめた。

「私は、美魅の為にしたことなのよ！？　それを……恩を仇で返すなんて……」

ミサトの顔から、完全に笑顔が消えた。笑顔の代わりに、“焦り”が見えた。

「私の為に……なんて……そんなのいらない！　私はただ……愛十と一緒にいるだけで……幸せだったのに……」

「うるさい……うるさいうるさいうるさい！　美魅には、私がいるじゃない！　私以外の女なんか、必要ないでしょ！　ね、そうでしょ……美魅？　美魅は、私の恋人だよね……？　そうでしょ！？」

そしてまた、ミサトは私の頬を殴った。口の中に、血の味が広がった……。そして、いっきに怒りの熱が引いた。

「……ミサトは……家族……だよ。近親相姦したって……血が繋がってなくったって……私の家族だから……恋人じゃない」

「違う……違う……違う違う違う違う違う！　美魅だって、あんなに私と愛し合ってくれたじゃない！」

「……本当は嫌だった……」

「っっ！？」

ミサトの体が、震えてた。そして、私の両腕を掴んでいた手が、いつの間にか解放されていた。

解放されたからといって……私に抵抗する力が、残っているわけではなかった。

「ミサトが笑ってくれるなら……たとえ犯されても……初めてを奪われてもよかった……。でも、本当はとっても嫌だった……」

「嘘……嘘だ……嘘よ！」

「ミサトの事は……好き」

「ほ、ほらみなさい！　どんなに言っても、私が好きなのは変わらないじゃな――――」

「でも……今は……“嫌い”」

“プチッ”と、何かが切れる音が聞こえた気がした。気がした直後に……私は“殴られていた”。

蹴飛ばされた……踏まれた……頭を床に叩きつけられた……鼻血が出た……口の中をいっぱい切った。

「あぁあぁ――――――」

耳をつんざくような、ミサトの悲鳴に似た怒りの声に、私の体は動かなくなった。

そして……意識もなくなった。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

どれだけの時間が流れたのだろうか……。一時間……もしくは一分かもしれない。
気がついても、体中が痛みで動けなくなっていた。
そして、視界に広がったのは……ぐちゃぐちゃになったリビングだった。

晩御飯のおかずが飛び散り、割れた皿の破片も飛び散り、ソファーやクッションも、ズタズタに引き裂かれていた。椅子やテーブルも引っくり返り、蛍光灯も割れていた。窓ガラスも割れていて、風が通り抜けている。

真っ暗な、今このリビングを照らしているのは、優しい月明かりだった。

そして私は……ミサトに膝枕をされていた……。

「美魅は……私だけの美魅なの……美魅は……私だけの美魅なの……」

繰り返し繰り返し、ミサトは呟いていた。ミサトの瞳には……光も闇も無く……ただ私だけが映っていた。私だけを映し……泣いてい

た。

「……ミサ……ト……」

「美魅……ごめんなさい……私……美魅に……こんな……」

ミサトが苦しんでいた……私のせいで、苦しんでいた。私が……苦しませた。

「ミサト……泣かないで……」

「でも……美魅……」

「私が……側にいるから……ずっとずっと……側にいるから……」

……ミサトが、こうなってしまったのは……私の責任だと気づいた。
私がミサトを……歪ませてしまった。歪にしてしまった。
私のせいで、私の選択がどこかで間違ったせいで……ミサトを歪ませた。私のせいで、愛十を苦しませた。

ミサトは悪くない。何も悪くない。悪いのは……私。弱い私。
弱い私はミサトを弱くした。
それは……償えない罪。
だから……私はその罪を……受け入れなきゃならない。

「美魅……私のこと……“好き”？」

「っ……」

そう……全ての罪を、受け入れなきゃならない。

「好きよ……ミサト。だから……泣かないで……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3336l/

女王様は王子様！？

2011年12月17日09時47分発行